

Document made available under the Patent Cooperation Treaty (PCT)

International application number: PCT/JP2005/019399

International filing date: 21 October 2005 (21.10.2005)

Document type: Certified copy of priority document

Document details: Country/Office: JP
Number: 2004-306986
Filing date: 21 October 2004 (21.10.2004)

Date of receipt at the International Bureau: 22 December 2005 (22.12.2005)

Remark: Priority document submitted or transmitted to the International Bureau in compliance with Rule 17.1(a) or (b)



World Intellectual Property Organization (WIPO) - Geneva, Switzerland
Organisation Mondiale de la Propriété Intellectuelle (OMPI) - Genève, Suisse

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日
Date of Application: 2 0 0 4 年 1 0 月 2 1 日

出 願 番 号
Application Number: 特 願 2 0 0 4 - 3 0 6 9 8 6

パリ条約による外国への出願
に用いる優先権の主張の基礎
となる出願の国コードと出願
番号
J P 2 0 0 4 - 3 0 6 9 8 6
The country code and number
of your priority application,
to be used for filing abroad
under the Paris Convention, is

出 願 人
Applicant(s): ソニー株式会社

2 0 0 5 年 1 2 月 7 日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

中 嶋



【書類名】	特許願
【整理番号】	0490566402
【提出日】	平成16年10月21日
【あて先】	特許庁長官殿
【国際特許分類】	G02B 27/18
【発明者】	
【住所又は居所】	東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号
【氏名】	ソニー株式会社内 西川 純
【発明者】	
【住所又は居所】	東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号
【氏名】	ソニー株式会社内 須永 敏弘
【特許出願人】	
【識別番号】	000002185
【氏名又は名称】	ソニー株式会社
【代理人】	
【識別番号】	100069051
【弁理士】	
【氏名又は名称】	小松 祐治
【電話番号】	0335510886
【選任した代理人】	
【識別番号】	100116942
【弁理士】	
【氏名又は名称】	岩田 雅信
【電話番号】	0335510886
【手数料の表示】	
【予納台帳番号】	048943
【納付金額】	16,000円
【提出物件の目録】	
【物件名】	特許請求の範囲 1
【物件名】	明細書 1
【物件名】	図面 1
【物件名】	要約書 1
【包括委任状番号】	0117652

【書類名】特許請求の範囲

【請求項 1】

縮小側の 1 次像面から拡大側の 2 次像面へ拡大投射する投射光学系であって、

上記 1 次像面の中間像を結像する第 1 光学系と、

上記中間像による上記 2 次像面を形成させる凹面反射面を有する第 2 光学系とを備え、

上記第 1 光学系及び第 2 光学系を構成する各面は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、

上記 1 次像面の中心から上記 2 次像面の中心に至る光線が上記光軸を交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記 2 次像面に到達する

ことを特徴とする投射光学系。

【請求項 2】

上記第 1 光学系によって、上記中間像が上記第 2 光学系の上記凹面反射面より上記 1 次像面側に結像される

ことを特徴とする請求項 1 に記載の投射光学系。

【請求項 3】

上記第 1 光学系の長さを L_s 、上記第 1 光学系から上記中間像までの距離を S_i として、以下の条件式 (1) を満足することを特徴とする請求項 2 に記載の投射光学系。

$$(1) S_i / L_s < 2$$

【請求項 4】

上記第 1 光学系から上記凹面反射面までの上記光軸上の距離を S_{12} 、上記凹面反射面の近軸の曲率半径を R として、以下の条件式 (2) を満足することを特徴とする請求項 2 に記載の投射光学系。

$$(2) S_{12} > |R| / 2$$

【請求項 5】

上記第 2 光学系は、上記凹面反射面の拡大側又は縮小側に凸面反射面を有している

ことを特徴とする請求項 4 に記載の投射光学系。

【請求項 6】

上記凸面反射面から上記凹面反射面までの距離を S_{R12} として、以下の条件式 (3) を満足することを特徴とする請求項 5 に記載の投射光学系。

$$(3) S_{R12} > |R| / 2$$

【請求項 7】

上記凹面反射面は近軸の曲面に対し上記光軸から離れるに従って曲率が小さい形状であることを特徴とする請求項 1 乃至 6 のいずれかに記載の投射光学系。

【請求項 8】

上記凹面反射面は上記光軸に対し回転対称非球面である

ことを特徴とする請求項 1 に記載の投射光学系。

【請求項 9】

上記回転対称非球面の形状を示す関数は奇数次非球面係数を含む

ことを特徴とする請求項 8 に記載の投射光学系。

【請求項 10】

上記凸面反射面の少なくとも 1 面が回転対称非球面で構成されている

ことを特徴とする請求項 5 に記載の投射光学系。

【請求項 11】

上記第 1 光学系の 1 面以上が回転対称非球面で構成されている

ことを特徴とする請求項 5 に記載の投射光学系。

【請求項 12】

光源と、

上記光源から発せられた光を映像信号にも基づき変調して出力する変調手段と、

上記変調手段側の 1 次像面からスクリーン側の 2 次像面へ拡大投射する投射光学系とを備え、

上記投射光学系は、

上記１次像面の中間像を結像する第１光学系と、上記中間像による２次像面を形成させる凹面反射面を有する第２光学系とを有し、

上記第１光学系及び第２光学系は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、

上記１次像面の中心から上記２次像面の中心に至る光線が上記光軸と交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記２次像面に到達する

ことを特徴とする投射型画像表示装置。

【請求項１３】

上記スクリーンは透過型スクリーンであり、

上記スクリーンが前面に配置されたキャビネットに、上記光源、上記変調手段及び上記投射光学系を内蔵し、

上記投射光学系により上記透過型スクリーンに背面から拡大投射する

ことを特徴とする請求項１２に記載の投射型画像表示装置。

【請求項１４】

上記１次像面の中心から上記２次像面の中心に至る光線は上記光軸を垂直面内にて交差し、上記第１光学系と上記第２光学系との間に上記光線を反射して水平面内に偏向する反射手段をさらに備えている

ことを特徴とする請求項１２に記載の投射型画像表示装置。

【書類名】 明細書

【発明の名称】 投射光学系及び投射型画像表示装置

【技術分野】

【0001】

本発明は新規な投射光学系及び投射型画像表示装置に関する。詳しくは、低歪曲で高解像力を維持しつつ、奥行を小さくし、かつ、画面の下方（又は上方）部分を小さくする技術に関する。

【背景技術】

【0002】

最近、リアプロジェクションテレビに対する需要が急速に高まって来ている。リアプロジェクションテレビは、LCD（Liquid Crystal Display）直視型テレビ、PDP（Plasma Display Panel）に代表されるフラットテレビとしての要素を持ち、且つ、それらと比較して、1インチ程度の画像表示素子を拡大投射するシステムであるため、低価格で提供することが出来る。また、BS（Broadcasting Satellite）、地上波デジタル放送に代表されるような、フルHD（High Definition）信号レベルの高画質化の要求に対しても、比較的容易に対応することが出来るのが主要因である。

【0003】

その一方、光源、照明光学系、投射光学系を搭載し、大口径の背面ミラーを使用してスクリーンに投射するため、図43に示すように、光軸aが画像表示素子b及びスクリーンcの中心を通るように投射する従来の方法では、原理的に見て、奥行dと画面下方の大きさeとを同時に小さくすることは非常に困難である。

【0004】

その他にも、投射画像の大型化を達成しつつもリアプロジェクションテレビの薄型化（奥行方向の小型化）を達成するために、スクリーンに対して斜方向から投射する（以下、「斜め投射」という）光学系がある。例えば、特許文献1には、投射光学系として大画角の広角レンズを用い、投射光学系の光軸に対して、画像表示素子及びスクリーンをシフトして配置し、画角の端の部分を使用することによって斜め投射を行うものが提案されている。また、特許文献2には、ライトバルブに基づく画像光を第1の投射光学系によって中間結像させ、第2の投射光学系によってスクリーンに拡大投射し、各投射光学系の光軸を適当に傾けることによって、斜め投射を行うものが提案されている。また、最近では、広角化に伴う色収差の発生を抑えるために反射面を利用して斜め投射を実現した投射光学系が提案されている。特許文献3に示されている投射光学系では、主に屈折光学系gと凸面反射面fから成る光学系を用いて斜め投射を実現している。図44は特許文献3に示されている光学系の概略を示すものである。また、特許文献4では、画像表示パネルhから順に凹、凸、凸、凸の4枚の反射面i、j、k、lを用いて色収差の無い投射光学系を達成している（図45参照）。これら特許文献で示された光学系は、光軸に対して回転対称な構成をしており、超広角光学系的一部分を使用して斜め投射を行っている。特許文献5では、オフアキシアルな光学系を用いた斜め投射光学系が提案されている。この光学系ではオフアキシアルな光学系を用いることにより台形歪を補正し、さらに、複数の反射面m、m、・・・と反射面nとの間で中間像を結ぶことにより反射面の大きさを抑えた投射光学系を達成している。

【0005】

【特許文献1】 特開平5-100312号公報

【特許文献2】 特開平5-80418号公報

【特許文献3】 再公表特許W001/006295号公報

【特許文献4】 特開2002-40326号公報

【特許文献5】 特開2001-255462号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0006】

特許文献3に示された光学系のように、凸面反射面fと屈折光学系gとを組み合わせた投射光学系の場合、屈折光学系のみ構成と比較して、色収差が取りやすく、且つ、広角化が容易である。その反面一つの反射面で発散作用のほとんどを担うため、歪曲や像面の収差補正を適切にするには、その屈折力を有る程度小さくしなければならず、必然的に、凸面反射面fの大型化及びサグ量の増大化を招く傾向を持つ。このことは、凸面反射面の製造が困難になるだけでなく、画面下方部分（図43のe参照）が高くなり、また、奥行（図43のd参照）も大きくなる。

【0007】

特許文献4に示された投射光学系では、屈折光学系を有しないため、原理的に色収差は発生せず、且つレンズによる吸収もないため、明るい光学系を達成することが出来る。しかしながら、反射面のみでの構成となるため、各反射面の面精度、組み立て精度に非常に敏感であり、製造コストが増大する傾向にある。また、複数の反射面i~1を縦方向に配置するため、画面下方の部分（図43のe参照）が高くなる。さらに、薄型化をするために、投射角度をさらに大きくすると、反射面、特に、最終段の反射面1が大きくなってしまい、反射面の製造が困難になると共に、画面下方の部分のさらなる大型化を招く。

【0008】

特許文献5に記載されている投射光学系の場合、中間結像面を持つことで、広角化しつつも反射面を小さくすることが出来るという利点を持つ。その反面、反射面を偏心させることにより発生する偏心収差を残りの偏心された反射面で補正することになり、少なくとも反射面が3面以上必要となる。さらに、反射面は回転対称な構成ではなく、自由曲面で構成され、面精度、組み立て精度に非常に敏感で、製造が難しくコストアップにつながるという問題がある。リアプロジェクションテレビ用の光学系のように、量産性を必要とされる投射光学系には不向きである。

【0009】

そこで、本発明は、上記した従来の問題点に鑑み、回転対称光学系を用い、低歪曲で高解像力を維持しつつ、反射面の大きさを小さくしつつ、反射面の数を削減した投射光学系を提供することを課題とする。

【課題を解決するための手段】

【0010】

本発明投射光学系は、上記した課題を解決するために、縮小側の1次像面の中間像を結像する第1光学系と、上記中間像による拡大側の2次像面を形成させる凹面反射面を有する第2光学系とを備え、上記第1光学系及び第2光学系を構成する各面は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、上記1次像面の中心から上記2次像面の中心に至る光線が上記光軸を交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記2次像面に到達するように構成したものである。

【0011】

また、本発明投射型画像表示装置は、上記した課題を解決するために、光源と、上記光源から発せられた光を映像信号にも基づき変調して出力する変調手段と、上記変調手段側の1次像面からスクリーン側の2次像面へ拡大投射する投射光学系とを備え、上記投射光学系は、上記1次像面の中間像を結像する第1光学系と、上記中間像による2次像面を形成させる凹面反射面を有する第2光学系とを有し、上記第1光学系及び第2光学系は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、上記1次像面の中心から上記2次像面の中心に至る光線が上記光軸と交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記2次像面に到達するように構成したものである。

【0012】

従って、本発明にあっては、1次像面の中心から2次像面の中心に至る光線が第1及び第2光学系に共通の光軸を交差し、次いで凹面反射面で反射され、再度上記光軸と交差して2次像面に到達する光路を辿る。

【発明の効果】

【0013】

本発明投射光学系は、縮小側の１次像面から拡大側の２次像面へ拡大投射する投射光学系であって、上記１次像面の中間像を結像する第１光学系と、上記中間像による上記２次像面を形成させる凹面反射面を有する第２光学系とを備え、上記第１光学系及び第２光学系を構成する各面は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、上記１次像面の中心から上記２次像面の中心に至る光線が上記光軸を交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記２次像面に到達することを特徴とする。

【００１４】

また、本発明投射型画像表示装置は、光源と、上記光源から発せられた光を映像信号にも基づき変調して出力する変調手段と、上記変調手段側の１次像面からスクリーン側の２次像面へ拡大投射する投射光学系とを備え、上記投射光学系は、上記１次像面の中間像を結像する第１光学系と、上記中間像による２次像面を形成させる凹面反射面を有する第２光学系とを有し、上記第１光学系及び第２光学系は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、上記１次像面の中心から上記２次像面の中心に至る光線が上記光軸と交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記２次像面に到達することを特徴とする。

【００１５】

従って、本発明投射光学系にあっては、１次像面の中心から２次像面の中心に至る光線が第１及び第２光学系に共通の光軸を交差し、次いで凹面反射面で反射され、再度上記光軸と交差して２次像面に到達する光路を辿るように構成することによって、第１光学系によって一旦中間結像面を形成し、該中間結像面の後に凹面反射面を配置して再び第２像面に結像させるので、凹面反射面を大型化させること無しに、収差補正が良好にされ十分な光学性能を有する大型画面を形成することができる。

【００１６】

また、第１光学系及び第２光学系は共通の光軸を中心とする回転対称面で構成されているため、製造が容易であり、安価な光学系を構成することができる。

【００１７】

さらに、本発明投射型画像表示装置は、上記した投射光学系を使用して変調手段で形成された画像をスクリーンに投射するので、薄型化とスクリーン下方（又は上方）の小型化を達成しながら、収差補正が良好にされ十分な光学性能を有する大型の拡大画像を表示することができる。

【００１８】

請求項２に記載した発明にあっては、上記第１光学系によって、上記中間像が上記第２光学系の上記凹面反射面より上記１次像面側に結像されるので、最初の凹面反射面の大型化を防ぎつつ、収差補正が良好にされ十分な光学性能を有する大型の２次像面を形成することができる。

【００１９】

請求項３に記載した発明にあっては、上記第１光学系の長さを L_s 、上記第１光学系から上記中間像までの距離を S_i として、条件式（１） $S_i / L_s < 2$ を満足するので、１次像面から第２光学系までの距離が適切になり、奥行を小さくすることができる。

【００２０】

請求項４に記載した発明にあっては、上記第１光学系から上記凹面反射面までの上記光軸上の距離を S_{12} 、上記凹面反射面の近軸の曲率半径を R として、条件式（２） $S_{12} > |R| / 2$ を満足するので、凹面反射面と２次像面との間に瞳を構成することにより光路の引き回しが効率よく行われる。

【００２１】

請求項５に記載した発明にあっては、上記第２光学系は、上記凹面反射面の拡大側又は縮小側に凸面反射面を有しているので、２つの反射面によってそれぞれ像の拡大が行われ、一つ一つの反射面にかかる負荷が小さく、収差補正が容易である。また、２つの反射面を対向配置して光路の折り返しをすることによって奥行方向をさらに小型化することができる。

【0022】

請求項6に記載した発明にあつては、上記凸面反射面から上記凹面反射面までの距離をSR12として、条件式(3) $SR12 > |R|/2$ を満足するので、凹面反射面と2次像面との間に瞳を構成することにより光路の引き回しが効率よく行われる。

【0023】

請求項7に記載した発明にあつては、上記凹面反射面は近軸の曲面に対し上記光軸から離れるに従って曲率が小さい形状であるので、2次像面の隅々に至るまで、湾曲を生じること無しに結像させることができる。

【0024】

請求項8に記載した発明にあつては、上記凹面反射面は上記光軸に対し回転対称非球面であるので、凹面反射面の製造が容易であり、安価で面精度の良い凹面反射面を形成することができる。

【0025】

請求項9に記載した発明にあつては、上記回転対称非球面の形状を示す関数は奇数次非球面係数を含むので、歪曲収差を適切にコントロールすることができ、所望の反射性能を得るのが容易である。

【0026】

請求項10に記載した発明にあつては、上記凸面反射面の少なくとも1面が回転対称非球面で構成されているので、凸面反射面の製造が容易であり、安価で面精度の良い凸面反射面を形成することができる。

【0027】

請求項11に記載した発明にあつては、上記第1光学系の1面以上が回転対称非球面で構成されているので、特に像面湾曲のコントロールが容易になる。これにより、レンズ枚数の低減やF値を小さくすることが可能になり、低コスト、高画質の光学系を提供することができる。

【0028】

請求項13に記載した発明にあつては、上記スクリーンは透過型スクリーンであり、上記スクリーンが前面に配置されたキャビネットに、上記光源、上記変調手段及び上記投射光学系を内蔵し、上記投射光学系により上記透過型スクリーンに背面から拡大投射するので、薄型の液晶パネルやPDPを使用したフラットテレビと同様の外観を呈するリアプロジェクションテレビを構成することができる。

【0029】

請求項14に記載した発明にあつては、上記1次像面の中心から上記2次像面の中心に至る光線は上記光軸を垂直面内にて交差し、上記第1光学系と上記第2光学系との間に上記光線を反射して水平面内に偏光する反射手段をさらに備えているので、上記第1光学系を構成する光学部材の光軸をスクリーン面と平行に配置することができ、奥行方向のさらなる小型化が可能である。

【発明を実施するための最良の形態】

【0030】

以下に、本発明投射光学系及び投射型画像表示装置を実施するための最良の形態について添付図面を参照して説明する。

【0031】

本発明投射光学系は、縮小側の1次像面から拡大側の2次像面へ拡大投射する投射光学系であつて、上記1次像面の中間像を結像させる凹面反射面を有する第1光学系と、上記中間像による上記2次像面を形成する第2光学系とを備え、上記第1光学系及び第2光学系を構成する各面は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、上記1次像面の中心から上記2次像面の中心に至る光線が上記光軸を交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記2次像面に到達する。結像関係を要約すれば、第1光学系によって1次像面の中間像が形成され、そのあと凹面反射面により収斂光になり瞳を形成して2次像面として結像する構成をとっている。上記第1光学系による中間像は倍率が低く

、第2光学系によって拡大され所定の倍率で2次像面として結像する。

【0032】

特許文献3に記載された光学系のように、凸面反射面に像を拡大する効果を持たせた場合、凸面反射面の曲率を小さくすると光線がけられてしまって、1枚の凸面反射面のみでは拡大率を大きくすることができず、また、凸面反射面の曲率を大きくすると、収差補正が困難になり、十分な光学性能を得ることができない。これを避けるため、複数の凸面反射面を使用してパワーの分散を行って個々の凸面反射面の曲率を小さくすると、複数の凸面反射面の配置のための所要スペースによってさらに光学系が大きくなってしまう。

【0033】

それに対し、凹面反射面であれば、曲率を小さくしても光線がけられにくい。凸面反射面と凹面反射面の画角を広げる効果は、瞳位置の前後によって異なり、以下のようになる。

【0034】

(1) 瞳位置と結像位置(2次像面の位置)の間では凸面反射面が画角を広げる効果を持つ。

【0035】

(2) 結像位置(中間像の位置)と瞳位置の間では凹面反射面が画角を広げる効果を持つ。

【0036】

しかしながら、凹面反射面を使用した場合であっても、瞳位置から2次像面までの間に光学面が多いと、それら光学面は凹面反射面によって広がった光線を受光しなければならないので、それら光学面による光学系が大きくなってしまう。そのために、凹面反射面は2次像面側に配置する必要がある。そのために、本発明投射光学系にあっては、第1光学系により中間像を一旦形成し、そのあとに凹面反射面を配置し、再び2次像面として結像させるようにしている。また、この凹面反射面の直後に瞳を形成する構成となるように、凹面反射鏡を適切な位置に配置することで凹面反射面が大型化するのを防いでいる。

【0037】

そして、本発明投射光学系にあっては、凹面反射面と2次像面との間に瞳を構成することにより光路の引き回しを効率よく行っている。そのためには凹面の焦点距離 $|R|/2$ が第1光学系の最終面から前記凹面反射面までの光軸に沿った距離 S_{12} 、及び、凹面反射面から前後の反射面までの光軸に沿った距離 S_{R12} に対して、以下の条件式(2)、(3)のように小さくしなければならない。

【0038】

$$(2) S_{12} > |R|/2$$

$$(3) S_{R12} > |R|/2$$

本発明投射光学系を2次像面を形成するスクリーンの下側に配置した場合、光軸に近い光線はスクリーン上で下側に到達し、光軸から離れるに従ってスクリーン上の上部に到達する。つまり、光軸側の光線は結像位置が近く、光軸から離れるに従って結像位置が遠くなる。従って、スクリーン上に像面の湾曲を生じることなく結像させるためには、凹面反射面の近軸の曲率に対して、光軸から離れるに従って曲率が小さくなるように構成する必要がある。すなわち、円錐定数 $K < 1$ の領域となることが必要である。特に、放物面($K = -1$)、双曲線($K < -1$)付近であることが望ましい。

【0039】

また、凹面反射面は中間像よりも2次像面側に位置している必要がある。ここで、注意しなければならないのは、第1光学系で中間像を形成するときに1次像面から中間像までの距離が長くなってしまいがちである。この距離が長い場合、光学系も大きくなってしまうので第1光学系から中間像までの距離を抑えることが必要になる。目安として第1光学系の長さを L_s 、上記第1光学系から上記中間像までの距離を S_i とすると以下の条件式(1)を満たしていることが望ましい。

【0040】

$$(1) Si/Ls < 2$$

上記(1)式の左辺が2を超えてしまうと、1次像面から第2光学系までの距離が長くなってしまい、途中、平面ミラーで折り曲げても光学系は小さくならない。

【0041】

本発明投射光学系において、上記第1光学系及び第2光学系を構成する各面は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成されている。そのため、自由曲面や、オフアキシアルな面で構成する場合に比較して、各構成面の形成が容易であり、製造コストの低減に寄与し、且つ、各構成面の面精度も高くすることができ、その結果、優れた光学性能を出しやすい。

【0042】

また、本発明投射光学系においては、回転対称非球面を使用することが効果的である。そして、その回転対称非球面の形状は以下の数1式によって定義されるものとする。

【0043】

【数1】

$$Z = (h^2/r)/\{1 + \sqrt{1 - (1+K)h^2/r^2}\} + A4 \cdot h^4 + A6 \cdot h^6 + A8 \cdot h^8 + \dots$$

【0044】

ここで、

Z：非球面のサグ量

h：光軸に対して垂直な高さ

r：近軸の曲率半径

K：円錐定数

Ai：i次の非球面係数

とする。

【0045】

また、本発明投射光学系においては、奇数次の非球面係数を含む回転対称非球面を使用することが効果的である場合がある。その場合の回転対称非球面の形状は以下の数2式によって定義されるものとする。

【0046】

【数2】

$$Z = (h^2/r)/\{1 + \sqrt{1 - (1+K)h^2/r^2}\} + A1 \cdot h + A2 \cdot h^2 + A3 \cdot h^3 + A4 \cdot h^4 + A5 \cdot h^5 + A6 \cdot h^6 + A7 \cdot h^7 + A8 \cdot h^8 + A9 \cdot h^9 + \dots$$

【0047】

上記数2式に示されるように、光軸からの距離hの奇数次の項が存在することにより、偶数次の収差が発生するため、例えば、 h^3 の項を有する場合、2次の像面湾曲、歪曲収差が発生する。従って、凹面反射面に非球面係数を適切に与えることで、上記数1式による非球面を有する場合よりも歪曲収差を適切にコントロールすることができる。

【0048】

以下に、本発明投射光学系及び投射型画像表示装置の実施形態及び数値実施例を図及び表を使用して説明する。

【0049】

(第1の実施の形態)

図1は本発明の第1の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ(投射型画像表示装置)の光学全系の概略を示す図である。また、図2には、投射光学系を拡大して示している。

【0050】

この第1の実施の形態を示す図において、Pは変調手段としての画像表示素子であり、

該画像表示素子Pにて図示しない光源から発せられた光が映像信号に基づいて変調されて1次像面が形成される。上記画像表示素子Pとしては、反射型あるいは透過型のドットマトリックス液晶パネルやデジタルマイクロミラーデバイス(DMD)等を用いることができる。また、図中のPPは偏光ビームスプリッタ(PBS)やダイクロイックプリズム、TIR(Total Internal Reflector)プリズム等を示している。STOPは絞りを示している。なお、プロジェクタには画像表示素子Pを照明する照明光学系が必要であるが図1、図2及びその他の第1の実施の形態を示す図では照明光学系を省略している。

【0051】

L1は屈折光学素子から成る第1光学系、L2は反射面R1、R2から成る第2光学系である。この第1光学系L1及び第2光学系L2から成る投射光学系により、画像表示素子Pによって画像変調された光(1次像面)をスクリーンSに導光し、スクリーンS上に画像(2次像面)を形成する。すなわち、第1光学系L1によって図1及び図2中IIの位置に中間結像をする。そのあと第2光学系L2の反射面R1、R2で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーンS上に結像する。図2に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸AXISに対して回転対称な形状を有している。なお、図2において、第2光学系L2の反射面R1、R2のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示してある。

【0052】

表1にこの第1の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例1のデータを示す。なお、以下の各表において、面番号は1次像面(表示素子側)側から2次像面(投射画像面)側へ1、2、3、・・・と増大するように付され、絞りに面番号は与えていない。また、曲率半径の列で「INF」は当該面が平面であることを示し、屈折率及びアッペ数は当該面を1次像面側に有する硝材のそれである。さらに、インチサイズは投射画像面の対角線の大きさを示し、非球面係数を示す「E」は10を底とする指数表現を意味している。

【0053】

【表 1】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	73.1"

		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッペ数)
表示素子面		INF	1.400	
1		INF	20.700	
2		INF	12.000	1.83962/42.8
3		INF	27.300	1.51872/64.0
4		INF	6.050	
5		54.33486	12.294	1.49845/81.2
6		-89.63152	2.549	
7		44.87269	9.194	1.49845/81.2
8		-106.88865	4.469	
9		-49.15493	1.783	1.81184/33.0
10		34.57615	2.987	
11		39.16911	10.719	1.49845/81.2
12		-32.74038	2.658	
13		-33.88982	1.581	1.81184/33.0
14		-204.17705	7.015	
15		-1450.76818	5.146	1.85505/23.6
16		-47.28023	11.550	
絞り		INF	26.546	
17		-30.01628	1.800	1.83962/42.8
18		-40.25509	27.966	
19		46.38086	14.898	1.59142/61.0
20		-231.41988	12.849	
21		-91.96442	2.563	1.81263/25.3
22		-566.88378	0.300	
23		41.52448	10.030	1.67340/46.9
24		62.01431	9.000	
25		-70.56814	6.851	1.80831/46.3
26		46.59361	14.827	
27		-54.43436	12.414	1.81081/40.5
28		-47.66710	171.972	
29	非球面	1.01174E-05	-149.000	反射面(第1ミラー)
30	非球面	67.52094	485.861	反射面(第2ミラー)
投射画像面		INF		

29面 非球面係数			
K -28531.19104			
A4 -0.337498E-08	A6 0.665793E-11	A8 -0.831931E-15	A10 0.510008E-19
A12 -0.158764E-23	A14 0.200226E-28		

30面 非球面係数			
K -2.694135			
A4 0.170688E-06	A6 -0.116784E-10	A8 0.647442E-15	A10 -0.199351E-19
A12 0.298396E-24	A14 -0.873758E-30		

【0054】

数値実施例1では、画像表示素子Pは、アスペクト比は16:9、画素数は1920×1080、大きさは0.61インチであり、73.1インチに拡大投影されており、Fナンバーは3である。画素サイズは画像表示素子P上で約7μm、スクリーンS上で約0.845mmになる。

【0055】

数値実施例1の投射光学系のスポットダイアグラムを図4に、ディストーションを図5に示す。スポットダイアグラムに示している(1)から(15)の画角は画像表示素子P

上で図3に示す(1)から(15)の各位置から発している。また、参照波長は656.28nm、620.0nm、587.56nm、546.07nm、460.0nm、435.84nmとしている。図4のスケールはスクリーンS上での1画素の2倍の長さである。図4に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図5に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が得られている。

【0056】

この数値実施例1にかかる投射光学系をリアプロジェクションテレビの内部に配置するには図6及び図7に示すように、光路を平面ミラーM1、M2で折り返してコンパクトにする必要がある。図6及び図7は投射光学系とスクリーンSとの間に平面ミラーM2、第1光学系L1と第2光学系L2との間に平面ミラーM1を配置して光路をうまく折り曲げた構成を示している。図7は側方から見た図であり、このように平面ミラーM1、M2で光路を折り曲げることにより装置の厚みが250mm以下の厚みとなり、画面下方部分も小さくすることが出来る。また、図8は図6及び図7中の投射光学系の部分を拡大して示している。この第1の実施の形態にかかる投射型画像表示装置では平面ミラーM1、M2を用いて光路を折り曲げることにより装置のコンパクト化を達成しているが、光路を折り曲げる方法は上記した方法に限るものではない。例えば、第1光学系L1内に平面ミラーを配置してもよいし、平面ミラーM2と凹面反射面R2との間に別の平面ミラーを配置する構成としても良い。

【0057】

(第2の実施の形態)

図9は本発明の第2の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ(投射型画像表示装置)の光学全系の概略を示す図である。また、図10には、投射光学系を拡大して示している。

【0058】

この第2の実施の形態を示す図において、Pは画像表示素子であり、該画像表示素子Pに1次像面が形成される。上記画像表示素子Pとしては、デジタルマイクロミラーデバイス(DMD)を用いることができる。STOPは絞りを示している。なお、プロジェクタには画像表示素子Pを照明する照明光学系が必要であるが図9、図10及びその他の第2の実施の形態を示す図では照明光学系を省略している。

【0059】

L1は屈折光学素子から成る第1光学系、L2は反射面R1、R2から成る第2光学系である。この第1光学系L1及び第2光学系L2から成る投射光学系により、画像表示素子Pによって画像変調された光(1次像面)をスクリーンSに導光し、スクリーンS上に画像(2次像面)を形成する。図9及び図10中I1の位置に第1光学系L1によって中間結像をする。そのあと反射面R1、R2で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーンS上に結像する。図10に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸AXISに対して回転対称な形状を有している。なお、図10において、第2光学系L2の反射面R1、R2のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示してある。

【0060】

表2にこの第2の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例2のデータを示す。

【0061】

【表 2】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	50"

		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッペ数)
表示素子面		INF	54	
絞り		INF	2.000	
1		-52.65808	5.807	1.67000/47.97
2		-23.18766	0.937	
3		-20.50806	3.000	1.63003/35.48
4		-36.35509	0.100	
5		60.64965	8.053	1.49845/81.20
6		-33.07412	0.100	
7		-58.53481	3.000	1.51978/51.85
8		41.88391	0.249	
9		45.54872	3.341	1.76167/27.31
10		52.75286	0.576	
11		69.66878	8.817	1.49845/81.20
12		-32.45941	1.122	
13		-26.48920	12.000	1.52033/58.69
14		-87.21177	26.181	
15		46.33716	14.214	1.62286/60.10
16		-89.13615	0.500	
17		-84.27186	8.911	1.67764/31.92
18		185.40020	4.858	
19		-81.21411	5.232	1.69416/30.92
20		58.72757	5.160	
21		92.26113	13.991	1.76167/27.31
22		-51.22638	0.100	
23		-60.90220	3.000	1.52033/58.69
24		47.28213	183.365	
25	非球面	100.00000	-140.000	反射面(第1ミラー)
26	非球面	69.81598	368.158	反射面(第2ミラー)
投射画像面		INF		

25面 非球面係数			
K -3.53735e+006			
A4 -2.02633e-009	A6 1.58657e-012	A8 -8.56678e-017	A10 1.46304e-021

26面 非球面係数			
K -2.34164e+000			
A4 1.07990e-007	A6 -3.97824e-012	A8 1.26325e-016	A10 -1.14881e-021

【0062】

画像表示素子Pとしては、DMDが使用されており、アスペクト比16:9、画素数は1280×768、大きさは0.7インチであり、スクリーンS上に50インチに拡大投影されており、Fナンバーは3である。画素サイズは画像表示素子P上で約12μm、スクリーン上で約0.86mmになる。画像表示素子Pと投射光学系の間に絞りSTOPを有しており、画像表示素子Pで反射したONの光は絞りSTOPを通過し投射光学系を経てスクリーンSに到達するが、OFFの光は絞りSTOPにより遮断される。絞りSTOPを通過したONの光は屈折光学系L1により図9、10中IIの位置に中間結像をする

。そのあと反射面 R 1、R 2 で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーン上に結像する。

【0063】

数値実施例 2 の投射光学系のスポットダイアグラムを図 1 2 に、ディストーションを図 1 3 に示す。スポットダイアグラムに示している (1) から (15) の画角は画像表示素子 P 上で図 1 1 に示す (1) から (15) の各位置から発している。また、参照波長は 656.28nm、620.0nm、587.56nm、546.07nm、460.0nm、435.84nm としている。図 1 2 のスケールはスクリーン上での 1 画素の 2 倍の長さである。図 1 2 に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図 1 3 に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が取れている。

【0064】

この数値実施例 2 にかかる投射光学系をリアプロジェクションテレビの内部に配置するには図 1 4 及び図 1 5 に示すように、平面ミラー M 1、M 2 で光路を折り返してコンパクトにする必要がある。図 1 4 及び図 1 5 は投射光学系とスクリーン S との間に平面ミラー M 2、第 1 光学系 L 1 と第 2 光学系 L 2 との間に平面ミラー M 1 を配置して光路をうまく折り曲げた構成を示している。図 1 5 は、側方から見た図であり、このように平面ミラー M 1、M 2 で光路を折り曲げることにより装置の厚みが 250mm 以下の厚みとなり、画面下方部分も小さくすることが出来る。また、図 1 6 は図 1 4 及び図 1 5 中の投射光学系の部分を拡大して示している。この第 2 の実施の形態にかかる投射型画像表示装置では平面ミラー M 1、M 2 を用いて光路を折り曲げることにより装置のコンパクト化を達成しているが、光路を折り曲げる方法は上記した方法に限るものではない。例えば、第 1 光学系 L 1 内に平面ミラーを配置してもよいし、平面ミラー M 2 と凹面反射面 R 2 との間に別の平面ミラーを配置する構成としても良い。

【0065】

(第 3 の実施の形態)

図 1 7 は本発明の第 3 の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ (投射型画像表示装置) の光学全系の概略を示す図である。また、図 1 8 には、投射光学系を拡大して示している。

【0066】

この第 3 の実施の形態を示す図において、P は画像表示素子であり、該画像表示素子 P に 1 次像面が形成される。上記画像表示素子 P としては、反射型のドットマトリックス液晶パネルやデジタルマイクロミラーデバイス (DMD) 等を用いることができる。また、図中の P P は偏光ビームスプリッタ (PBS) やダイクロイックプリズム、TIR (Total Internal Reflector) プリズム等を示している。STOP は絞りを示している。なお、プロジェクタには画像表示素子 P を照明する照明光学系が必要であるが図 1 7 及び図 1 8 では照明光学系を省略している。

【0067】

L 1 は屈折光学素子から成る第 1 光学系、L 2 は反射面 R 1、R 2 から成る第 2 光学系である。この第 1 光学系 L 1 及び第 2 光学系 L 2 から成る投射光学系により、画像表示素子 P によって画像変調された光 (1 次像面) をスクリーン S に導光し、スクリーン S 上に画像 (2 次像面) を形成する。図 1 7 及び図 1 8 中 I I の位置に第 1 光学系 L 1 によって中間結像をする。そのあと反射面 R 1、R 2 で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーン S 上に結像する。図 1 8 に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸 A X I S に対して回転対称な形状を有している。なお、図 1 8 において、第 2 光学系 L 2 の反射面 R 1、R 2 のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示してある。

【0068】

表 3 にこの第 3 の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例 3 のデータを示す。

【0069】

【表 3】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	55.8"

		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッペ数)
表示素子面		INF	1.400	
1		INF	20.700	
2		INF	12.000	1.83962/42.8
3		INF	27.300	1.51872/64.0
4		INF	6.050	
5		50.01335	12.300	1.49845/81.2
6		-102.48537	3.027	
7		69.66588	8.000	1.49845/81.2
8		-102.39250	4.516	
9		-49.22953	1.810	1.81184/33.0
10		57.85879	1.068	
11		36.59180	10.025	1.49845/81.2
12		-44.14826	5.030	
13		-35.10091	1.510	1.81184/33.0
14		-109.43158	10.879	
15		125.64456	4.259	1.85505/23.6
16		-92.16590	6.182	
絞り		INF	17.304	
17		-25.90402	1.800	1.83962/42.8
18		-35.06784	43.616	
19	非球面	59.62194	5.000	1.51131/56.4
20	非球面	61.51696	1.000	
21		51.89543	15.200	1.59142/61.0
22		-573.87162	3.000	
23		163.59945	5.117	1.81263/25.3
24		72.87238	0.300	
25		38.56059	13.000	1.67340/46.9
26		46.24911	13.439	
27		-77.70400	2.470	1.80831/46.3
28		50.57931	15.590	
29		-62.19532	7.955	1.81081/40.5
30		-49.34022	171.604	
31	非球面	1.01174E-05	-149.000	反射面(第1ミラー)
32	非球面	72.72183	387.172	反射面(第2ミラー)
投射画像面		INF		

19面 非球面係数

K	-1.420362		
A4	-0.131048E-04	A6 0.526113E-08	A8 0.345041E-12 A10 0.611802E-16

20面 非球面係数

K	-6.286742		
A4	-0.104735E-04	A6 0.572168E-08	A8 -0.880556E-12 A10 0.356875E-15

31面 非球面係数

K	-28531.19104		
A4	-0.523359E-07	A6 0.157209E-10	A8 -0.172128E-14 A10 0.101543E-18
A12	-0.309504E-23	A14 0.381546E-28	

32面 非球面係数

K	-2.417695		
A4	0.116220E-06	A6 -0.588887E-11	A8 0.248721E-15 A10 -0.212607E-20
A12	-0.170341E-24	A14 0.475557E-29	

数値実施例 3 では、画像表示素子 P はアスペクト比は 16 : 9、画素数は 1920 × 1080、大きさは 0.61 インチであり、55.8 インチに拡大投影されており、F ナンバーは 3.0 である。画素サイズは画像表示素子 P 上で約 7 μm、スクリーン S 上で約 0.645 mm になる。

【0071】

数値実施例 3 の投射光学系のスポットダイアグラムを図 20 に、ディストーションを図 21 に示す。スポットダイアグラムに示している (1) から (15) の画角は画像表示素子 P 上で図 19 に示す (1) から (15) の各位置から発している。また、参照波長は 656.28 nm、620.0 nm、587.56 nm、546.07 nm、460.0 nm、435.84 nm としている。図 20 のスケールはスクリーン S 上での 1 画素の 2 倍の長さである。図 20 に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図 21 に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が得られている。

【0072】

この第 3 の実施の形態に係る投射光学系をプロジェクタ（投射型画像表示装置）に適用する場合、上記した第 1 及び第 2 の実施の形態におけると同様に、平面ミラーを適切な位置に配置することで投射光学系を薄くすることが可能である。

【0073】

（第 4 の実施の形態）

図 22 は本発明の第 4 の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ（投射型画像表示装置）の光学全系の概略を示す図である。また、図 23 には、投射光学系を拡大して示している。

【0074】

この第 4 の実施の形態を示す図において、P は画像表示素子であり、該画像表示素子 P に 1 次像面が形成される。上記画像表示素子 P としては、反射型のドットマトリックス液晶パネルやデジタルマイクロミラーデバイス（DMD）等を用いることができる。また、図中の PP は偏光ビームスプリッタ（PBS）やダイクロイックプリズム、TIR（Total Internal Reflector）プリズム等を示している。STOP は絞りを示している。なお、プロジェクタには画像表示素子 P を照明する照明光学系が必要であるが図 22 及び図 23 では照明光学系を省略している。

【0075】

L1 は屈折光学素子から成る第 1 光学系、L2 は反射面 R1、R2 から成る第 2 光学系である。この第 1 光学系 L1 及び第 2 光学系 L2 から成る投射光学系により、画像表示素子 P によって画像変調された光（1 次像面）をスクリーン S に導光し、スクリーン S 上に画像（2 次像面）を形成する。図 22 及び図 23 中 II の位置に第 1 光学系 L1 によって中間結像をする。そのあと反射面 R1、R2 で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーン S 上に結像する。図 23 に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸 AXIS に対して回転対称な形状を有している。なお、図 23 において、第 2 光学系 L2 の反射面 R1、R2 のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示している。

【0076】

表 4 にこの第 4 の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例 4 のデータを示す。

【0077】

【表 4】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	50"

		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッペ数)
表示素子面		INF	1.400	
1		INF	27.300	1.51872/64.00
2		INF	12.000	1.83962/42.75
3		INF	8.613	
4		-66.70934	4.619	1.76167/27.31
5		-40.20806	1.466	
6		33.43195	7.449	1.76167/27.31
7		131.35118	14.577	
8		59.72796	5.955	1.48914/70.24
9		-30.09630	3.000	1.75456/34.77
10		18.28717	0.100	
11		18.17450	7.246	1.48914/70.24
12		-23.90429	1.977	
13		-21.85215	3.000	1.81081/40.49
14		-303.96553	0.100	
15		109.80180	7.224	1.48914/70.24
16		-28.10454	0.100	
絞り		INF	99.059	
17		182.80303	15.241	1.67764/31.92
18		-135.37528	0.100	
19		64.12991	10.744	1.52033/58.69
20		119.23170	10.935	
21		-280.88707	3.000	1.72793/37.72
22		114.79624	216.118	
23	非球面	-73.93950	-120.000	反射面(第1ミラー)
24	非球面	-69.01404	229.652	反射面(第2ミラー)
投射画像面			0.000	

23面 非球面係数			
K -8.47354e-001			
A4 4.50856e-007	A6 -5.49282e-011	A8 7.19838e-015	A10 -3.75857e-019

24面 非球面係数			
K -1.43979e+001			
A4 3.27859e-008	A6 -1.83925e-012	A8 5.76078e-017	A10 -7.70233e-022

【0078】

数値実施例4では、画像表示素子Pは反射型ドットマトリックス液晶等の液晶素子であり、テレセントリックになっている。また、アスペクト比は16:9、画素数は1920×1080、大きさは0.61インチであり、50インチに拡大投影されており、Fナンバーは3.0である。画素サイズは画像表示素子P上で約7μm、スクリーンS上で約0

・ 58mmになる。

【0079】

数値実施例4の投射光学系のスポットダイアグラムを図25に、ディストーションを図26に示す。スポットダイアグラムに示している(1)から(15)の画角は画像表示素子P上で図24に示す(1)から(15)の各位置から発している。また、参照波長は656.28nm、620.0nm、587.56nm、546.07nm、460.0nm、435.84nmとしている。図25のスケールはスクリーン上での1画素の2倍の長さである。図25に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図26に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が得られている。

【0080】

この第4の実施の形態に係る投射光学系をプロジェクタ（投射型画像表示装置）に適用する場合、上記した第1及び第2の実施の形態におけると同様に、平面ミラーを適切な位置に配置することで投射光学系を薄くすることが可能である。

【0081】

（第5の実施の形態）

図27は本発明の第5の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ（投射型画像表示装置）の光学全系の概略を示す図である。また、図28には、投射光学系を拡大して示している。

【0082】

この第5の実施の形態を示す図において、Pは画像表示素子であり、該画像表示素子Pに1次像面が形成される。上記画像表示素子Pとしては、反射型のドットマトリックス液晶パネルやデジタルマイクロミラーデバイス（DMD）等を用いることができる。また、図中のPPは偏光ビームスプリッタ（PBS）やダイクロイックプリズム、TIR（Total Internal Reflector）プリズム等を示している。STOPは絞りを示している。なお、プロジェクタには画像表示素子Pを照明する照明光学系が必要であるが図27及び図28では照明光学系を省略している。

【0083】

L1は屈折光学素子から成る第1光学系、L2は反射面R1、R2から成る第2光学系である。この第1光学系L1及び第2光学系L2から成る投射光学系により、画像表示素子Pによって画像変調された光（1次像面）をスクリーンSに導光し、スクリーンS上に画像（2次像面）を形成する。図27及び図28中IIの位置に第1光学系L1によって中間結像をする。そのあと反射面R1、R2で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーンS上に結像する。図28に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸AXISに対して回転対称な形状を有している。なお、図28において、第2光学系L2の反射面R1、R2のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示してある。

【0084】

表5にこの第5の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例5のデータを示す。

【0085】

【表 5】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	52.5"

表示素子面		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッペ数)
1		INF	1.400	
2		INF	20.700	
3		INF	12.000	1.83962/42.8
4		INF	27.300	1.51872/64.0
5		INF	6.050	
6		59.22241	12.300	1.49845/81.2
7		-86.13954	4.172	
8		44.25213	9.409	1.49845/81.2
9		-96.55688	4.207	
10		-50.21938	1.779	1.81184/33.0
11		34.23739	3.003	
12		38.84939	10.553	1.49845/81.2
13		-33.38322	2.575	
14		-35.32416	1.574	1.81184/33.0
15		-294.59246	8.563	
16		-2771.84910	5.043	1.85505/23.6
17		-49.26150	10.336	
絞り		INF	32.667	
18		-31.30247	1.800	1.83962/42.8
19		-41.95428	21.541	
20		45.68213	15.174	1.59142/61.0
21		-179.12544	11.472	
22		-84.96068	2.526	1.81263/25.3
23		-513.97498	0.300	
24		38.82080	7.423	1.67340/46.9
25		55.78713	11.970	
26		-68.01291	8.000	1.80831/46.3
27		45.75187	14.403	
28		-55.92187	13.306	1.81081/40.5
29	非球面	-48.48920	170.904	
30	非球面	1.01174E-05	-151.155	反射面(第1ミラー)
30	非球面	68.49207	364.319	反射面(第2ミラー)
投射画像面		INF		

29面 非球面係数			
K	-28531.19104		
A4	0.124362E-07	A6	0.196046E-11
A12	-0.290651E-24	A8	-0.206541E-15
		A10	0.103413E-19

30面 非球面係数			
K	-2.4470		
A1	-1.1474E-02	A3	1.3489E-06
A6	-6.0609E-12	A4	1.1430E-07
A14	4.6396E-31	A5	1.8548E-11
		A8	2.8004E-16
		A10	-6.6302E-21
		A12	6.8785E-26

【0086】

この数値実施例5では、第30面、すなわち凹面反射面R2には奇数次の非球面係数が含まれており、従って、第30面の形状は上記した数2式によって表される。

【0087】

数値実施例 5 では、画像表示素子 P は、アスペクト比は 1 6 : 9、画素数は 1 9 2 0 × 1 0 8 0、大きさは 0. 6 1 インチであり、5 2. 5 インチに拡大投影されており、F ナンバーは 3. 0 である。画素サイズは画像表示素子上で約 7 μ m、スクリーン S 上で約 0. 6 0 5 mm になる。

【 0 0 8 8 】

数値実施例 5 の投射光学系のスポットダイアグラムを図 3 0 に、ディストーションを図 3 1 に示す。スポットダイアグラムに示している (1) から (1 5) の画角は画像表示素子 P 上で図 2 9 に示す (1) から (1 5) の各位置から発している。また、参照波長は 6 5 6. 2 8 nm、6 2 0. 0 nm、5 8 7. 5 6 nm、5 4 6. 0 7 nm、4 6 0. 0 nm、4 3 5. 8 4 nm としている。図 3 0 のスケールはスクリーン S 上での 1 画素の 2 倍の長さである。図 3 0 に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図 3 1 に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が得られている。

【 0 0 8 9 】

この第 5 の実施の形態に係る投射光学系をプロジェクタ（投射型画像表示装置）に適用する場合、上記した第 1 及び第 2 の実施の形態におけると同様に、平面ミラーを適切な位置に配置することで投射光学系を薄くすることが可能である。

【 0 0 9 0 】

（第 6 の実施の形態）

図 3 2 は本発明の第 6 の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ（投射型画像表示装置）の光学全系の概略を示す図である。また、図 3 3 には、投射光学系を拡大して示している。

【 0 0 9 1 】

この第 6 の実施の形態を示す図において、P は画像表示素子であり、該画像表示素子 P に 1 次像面が形成される。上記画像表示素子 P としては、デジタルマイクロミラーデバイス（DMD）を用いることができる。なお、プロジェクタには画像表示素子 P を照明する照明光学系が必要であるが図 3 2 及び図 3 3 では照明光学系を省略している。

【 0 0 9 2 】

L 1 は屈折光学素子から成る第 1 光学系、L 2 は反射面 R 1、R 2 から成る第 2 光学系である。この第 1 光学系 L 1 及び第 2 光学系 L 2 から成る投射光学系により、画像表示素子 P によって画像変調された光（1 次像面）をスクリーン S に導光し、スクリーン S 上に画像（2 次像面）を形成する。図 3 2 及び図 3 3 中 I I の位置に第 1 光学系 L 1 によって中間結像をする。そのあと反射面 R 1、R 2 で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーン S 上に結像する。図 3 3 に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸 A X I S に対して回転対称な形状を有している。なお、図 2 8 において、第 2 光学系 L 2 の反射面 R 1、R 2 のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示してある。

【 0 0 9 3 】

表 6 にこの第 6 の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例 6 のデータを示す。

【 0 0 9 4 】

【表 6】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	55.8"

		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッベ数)
表示素子面		INF	54.000	
絞り		INF	0.100	
1		71.13311578	3.000	1.76167/27.31
2		-132.8219538	6.435	
3		87.24914913	9.995	1.76167/27.31
4		-111.03702	0.100	
5		-477.69876	3.000	1.80932/39.39
6		34.30104	1.000	
7		42.77973	6.841	1.56605/60.58
8		-22.24372	3.000	1.73432/28.10
9		49.09361	0.100	
10		44.96886	5.684	1.48914/70.24
11		-52.48688	51.478	
12		-931.71066	5.000	1.76167/27.31
13		-302.78002	70.336	
14		94.02440	7.538	1.76167/27.31
15		298.10396	6.199	
16		-186.511621	5.000	1.74794/44.63
17		1081.95709	285.517	
18	非球面	-83.79108	-110.000	反射面(第1ミラー)
19	非球面	-177.21176	260.000	反射面(第2ミラー)
投射画像面		INF	1.000	

18面 非球面係数			
K -6.03097e-001			
A4 2.98655e-007	A6 -1.62107e-011	A8 1.53773e-015	A10 -2.42130e-020
A12 -2.52893e-024			

19面 非球面係数			
K -2.90510e+001			
A4 7.12285e-008	A6 -8.49805e-012	A8 6.28723e-016	A10 -2.49940e-020
A12 3.55011e-025			

【0095】

数値実施例6では、画像表示素子PはDMDであり、アスペクト比は16:9、画素数は1280×768、大きさは0.7インチであり、50インチに拡大投影されており、Fナンバーは3である。画素サイズは画像表示素子P上で約12μm、スクリーンS上で約0.86mmになる。画像表示素子Pと投射光学系の間に絞りSTOPを有しており、画像表示素子Pで反射したONの光は絞りSTOPを通過し投射光学系を経てスクリーンSに到達するが、OFFの光は絞りSTOPにより遮断される。絞りSTOPを通過したONの光は屈折光学系L1により図32、33中IIの位置に中間結像をする。そのあと

反射面 R 1 で反射され瞳の像を形成し、さらに、反射面 R 2 で反射しスクリーン S 上に結像する。

【0096】

数値実施例 6 の投射光学系のスポットダイアグラムを図 3 5 に、ディストーションを図 3 6 に示す。スポットダイアグラムに示している (1) から (15) の画角は画像表示素子上で図 3 4 に示す (1) から (15) の各位置から発している。また、参照波長は 656.28 nm、620.0 nm、587.56 nm、546.07 nm、460.0 nm、435.84 nmとしている。図 3 5 のスケールはスクリーン S 上での 1 画素の 2 倍の長さである。図 3 5 に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図 3 6 に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が得られている。

【0097】

この第 6 の実施の形態に係る投射光学系をプロジェクタ（投射型画像表示装置）に適用する場合、上記した第 1 及び第 2 の実施の形態におけると同様に、平面ミラーを適切な位置に配置することで投射光学系を薄くすることが可能である。

【0098】

（第 7 の実施の形態）

図 3 7 は本発明の第 7 の実施の形態にかかる投射光学系を用いたプロジェクタ（投射型画像表示装置）の光学全系の概略を示す図である。また、図 3 8 には、投射光学系を拡大して示している。

【0099】

この第 7 の実施の形態を示す図において、P は画像表示素子であり、該画像表示素子 P に 1 次像面が形成される。上記画像表示素子 P としては、反射型のドットマトリックス液晶パネルやデジタルマイクロミラーデバイス（DMD）等を用いることができる。また、図中の PP は偏光ビームスプリッタ（PBS）やダイクロイックプリズム、TIR（Total Internal Reflector）プリズム等を示している。STOP は絞りを示している。なお、プロジェクタには画像表示素子 P を照明する照明光学系が必要であるが図 3 7 及び図 3 8 では照明光学系を省略している。

【0100】

L 1 は屈折光学素子から成る第 1 光学系、L 2 は反射面 R 1 から成る第 2 光学系である。この第 1 光学系 L 1 及び第 2 光学系 L 2 から成る投射光学系により、画像表示素子 P によって画像変調された光（1 次像面）をスクリーン S に導光し、スクリーン S 上に画像（2 次像面）を形成する。図 3 7 及び図 3 8 中 I I の位置に第 1 光学系 L 1 によって中間結像をする。そのあと反射面 R 1 で反射されたあと、瞳の像を形成してスクリーン S 上に結像する。図 3 8 に示すように、この投射光学系のそれぞれの光学面は光軸 AXIS に対して回転対称な形状を有している。なお、図 3 8 において、第 2 光学系 L 2 の反射面 R 1 のうち使用しない部分、従って、除去されている部分を破線にて示してある。

【0101】

表 7 にこの第 7 の実施の形態にかかる投射光学系に具体的数値を適用した数値実施例 7 のデータを示す。

【0102】

【表 7】

Fナンバー	F/3.0
インチサイズ	62.6"

		曲率半径	間隔	硝材(e線の屈折率/アッベ数)
表示素子面		INF	0.900	
1		INF	30.000	1.51872/64.0
2		INF	5.000	
3		62.65902	9.402	1.48914/70.2
4		-82.6989	6.176	
5		36.38095	10.475	1.49845/81.2
6		-81.168	6.000	
7		-37.1714	1.539	1.64940/31.7
8		27.24078	3.912	
9		33.08227	10.504	1.49845/81.2
10		-28.5041	2.809	
11		-26.4725	1.341	1.61864/34.5
12		60.76307	1.402	
13		87.88232	6.476	1.75520/27.5
14		-32.7878	9.119	
絞り		INF	13.175	
15		-27.9681	1.500	1.54285/47.0
16		-52.9861	18.502	
17		91.05025	10.217	1.75450/51.6
18		-58.8245	3.649	
19		-49.6999	5.690	1.84666/23.8
20		-117.323	50.536	
21		68.55467	8.000	1.48914/70.2
22		46.45361	14.599	
23		-149.905	3.005	1.48914/70.2
24		115.63	5.973	
25		426.1313	6.000	1.84829/29.7
26		-670.278	250.000	
27	非球面	-88.935	-700.000	反射面(第1ミラー)
投射画像面				

27面 非球面係数			
K	-2.641049		
A4	-0.111535E-06	A6 0.386529E-11	A8 -0.317841E-16
A12	0.452284E-24	A14 -0.631588E-29	A16 -0.186046E-33
			A18 0.528090E-38

【0103】

数値実施例7では、画像表示素子Pは反射型ドットマトリックス液晶等の液晶素子であり、テレセントリックになっている。また、アスペクト比は16:9、画素数は1920×1080、大きさは0.61インチであり、62.6インチに拡大投影されており、Fナンバーは3.0である。画素サイズは画像表示素子P上で約7μm、スクリーン上で約0.725mmになる。

【0104】

数値実施例7の投射光学系のスポットダイアグラムを図40に、ディストーションを図41に示す。スポットダイアグラムに示している(1)から(15)の画角は画像表示素子P上で図39に示す(1)から(15)の各位置から発している。また、参照波長は656.28nm、620.0nm、587.56nm、546.07nm、460.0nm、435.84nmとしている。図40のスケールはスクリーンS上での1画素の2倍の長さである。図40に示すとおり十分な結像性能が得られている。また、図41に示すとおり目立った画像のゆがみは見られず十分な性能が得られている。

【0105】

この第7の実施の形態に係る投射光学系をプロジェクタ（投射型画像表示装置）に適用する場合、上記した第1及び第2の実施の形態におけると同様に、平面ミラーを適切な位置に配置することで投射光学系を薄くすることが可能である。

【0106】

上記した各数値実施例1乃至7の上記条件式(1)、(2)、(3)の関連データ及び対応データを表8に示す。

【0107】

●条件式関連データ

	実施例1	実施例2	実施例3	実施例4	実施例5	実施例6	実施例7	備考
Si1	186	183	180	155	185	230	152	第1光学系から中間像面までの距離(画面下端)
Si2	106	112	100	139	103	211	99	第1光学系から中間像面までの距離(画面中央)
Si3	42	50	42	124	37	179	46	第1光学系から中間像面までの距離(画面上端)
LS	211.99	131.25	213.40	195.89	214.10	184.81	210.00	第1光学系のレンズ全長
R	67.521	68.816	72.722	73.940	68.492	83.791	88.935	凹面反射面の曲率半径
K	-2.69	-2.34	-2.42	-0.85	-2.45	-0.60	-2.64	凹面反射面の田錐常数

●条件式対応データ

	実施例1	実施例2	実施例3	実施例4	実施例5	実施例6	実施例7	備考
Si1/Ls	0.88	1.39	0.84	0.79	0.86	1.24	0.72	Si1/Ls<2
Si2/Ls	0.50	0.85	0.47	0.71	0.48	1.14	0.47	Si1/Ls<2
Si3/Ls	0.20	0.38	0.20	0.63	0.17	0.97	0.22	Si1/Ls<2
R /2	33.760	34.408	36.361	36.970	34.246	41.896	44.468	Si2> R /2
Si2	321.0	323.4	320.6	216.1	322.1	285.5	250.0	SR12> R /2
SR12	149.0	140.0	149.0	120.0	151.2	110.0	(-)	

上記各数値実施例 1 乃至 7 の何れも条件式 (1)、(2)、(3) を満足していることが分かる。

【0109】

図 4 2 は上記数値実施例 2 における第 1 光学系 L 1 の中間像位置を示している。図中 Si 1、Si 2、Si 3 はスクリーン上で最下部、中央、最上部の画角の中間像位置から第 1 光学系 L 1 までの距離を表している。図 3 でいうと (1)、(7)、(13) の各ポイントとなる。それぞれ、 $Si\ 1 \div 183\text{ mm}$ 、 $Si\ 2 \div 112\text{ mm}$ 、 $Si\ 3 \div 50\text{ mm}$ である。第 1 光学系 L 1 の長さ L s は 131.25 mm なので条件式 (1) を満足している。そして、上記数値実施例 1 乃至 7 の何れもこの条件式 (1) を満足しており、さらに、条件式 (2)、(3) も満足している (表 8 参照)。

【0110】

以上の特徴や効果を適切に使用することで、歪曲を良好に補正しながらも、結像性能に優れた投射光学系を少ない反射面数でコンパクトに構成することができる。

【0111】

なお、上記した実施の形態では、透過型スクリーンに投影する投射型画像表示装置について説明したが、本発明投射型画像表示装置は反射型スクリーンに投影する装置として適用することが出来ることは勿論である。

【0112】

また、上記した実施の形態及び数値実施例に示した各部の具体的形状及び数値は、本発明を実施するに際して行う具体化のほんの一例を示したものにすぎず、これらによって本発明の技術的範囲が限定的に解釈されることがあってはならないものである。

【産業上の利用可能性】

【0113】

奥行及び高さ方向何れの寸法も小さく、しかも、拡大率の大きな投射光学系を提供することができ、特に、大型のリアプロジェクションテレビに適用して好適である。その他、狭い部屋等の限られた空間内での反射型スクリーン等への拡大投射に好適である。

【図面の簡単な説明】

【0114】

【図 1】図 2 乃至図 8 と共に第 1 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 2】投射光学系の拡大図である。

【図 3】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 4】図 3 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 5】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 6】図 7 及び図 8 と共にリアプロジェクションテレビの構成例を光跡の一部と共に示すものであり、本図はスクリーンの背面側から見た概略斜視図である。

【図 7】概略側面図である。

【図 8】投射光学系を示す拡大斜視図である。

【図 9】図 10 乃至図 16 と共に第 2 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 10】投射光学系の拡大図である。

【図 11】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 12】図 11 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 13】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 14】図 15 及び図 16 と共にリアプロジェクションテレビの構成例を光跡の一部と共に示すものであり、本図はスクリーンの背面側から見た概略斜視図である。

【図 15】概略側面図である。

【図 16】投射光学系を示す拡大斜視図である。

【図 1 7】図 1 8 乃至図 2 1 と共に第 3 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 1 8】投射光学系の拡大図である。

【図 1 9】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 2 0】図 1 9 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 2 1】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 2 2】図 2 3 乃至図 2 6 と共に第 4 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 2 3】投射光学系の拡大図である。

【図 2 4】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 2 5】図 2 4 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 2 6】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 2 7】図 2 8 乃至図 3 1 と共に第 5 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 2 8】投射光学系の拡大図である。

【図 2 9】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 3 0】図 2 9 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 3 1】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 3 2】図 3 3 乃至図 3 6 と共に第 6 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 3 3】投射光学系の拡大図である。

【図 3 4】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 3 5】図 3 4 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 3 6】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 3 7】図 3 8 乃至図 4 1 と共に第 7 の実施の形態を示すものであり、本図は投射型画像表示装置に使用した投射光学系を示す概略図である。

【図 3 8】投射光学系の拡大図である。

【図 3 9】画像表示素子上の評価点を示す図である。

【図 4 0】図 3 9 に示す各評価点から発した光のスクリーン上におけるスポットダイアグラムを示す図である。

【図 4 1】スクリーン上のディストーションを示す図である。

【図 4 2】第 2 の実施の形態に係る投射光学系の条件式 (1) の対応箇所を示す図である。

【図 4 3】従来のリアプロジェクションテレビの一般的な構造の概略を示す図である。

【図 4 4】特許文献 3 に示された投射光学系の概略を示す図である。

【図 4 5】特許文献 4 に示された投射光学系の概略を示す図である。

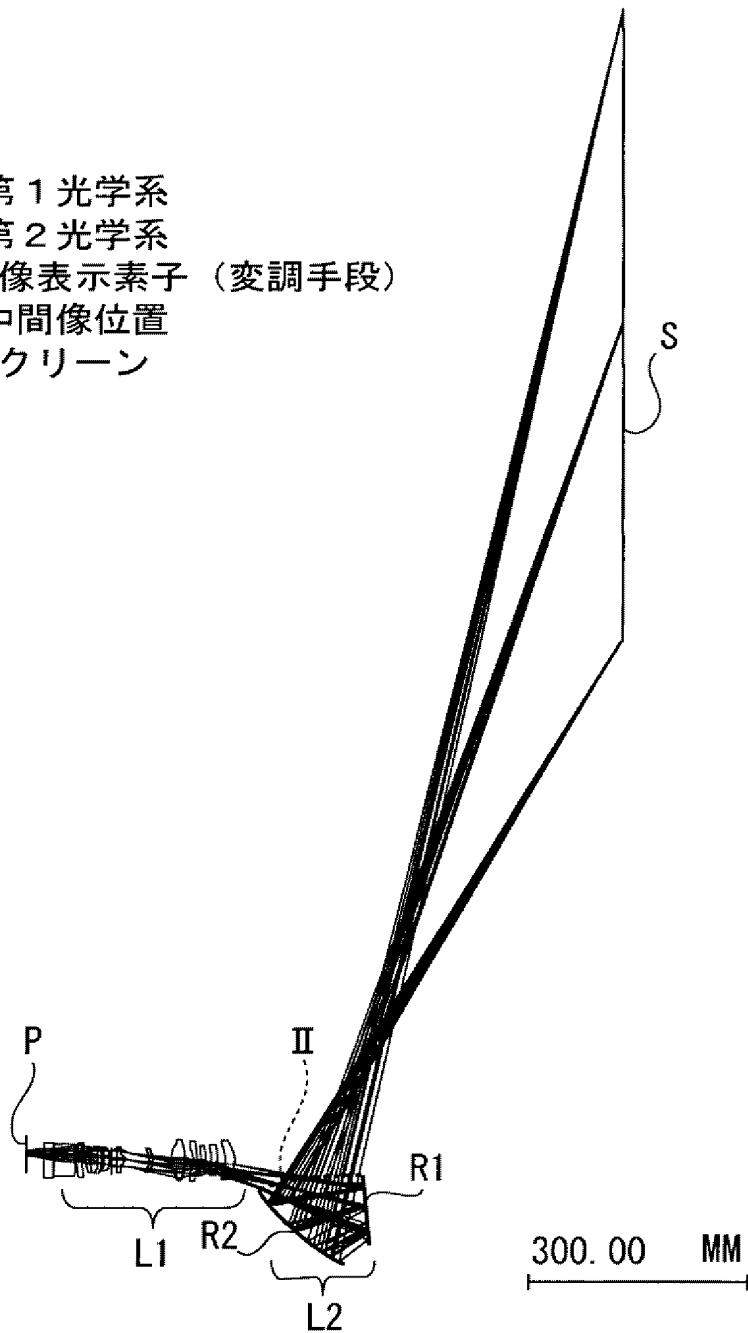
【図 4 6】特許文献 5 に示された投射光学系の概略を示す図である。

【符号の説明】

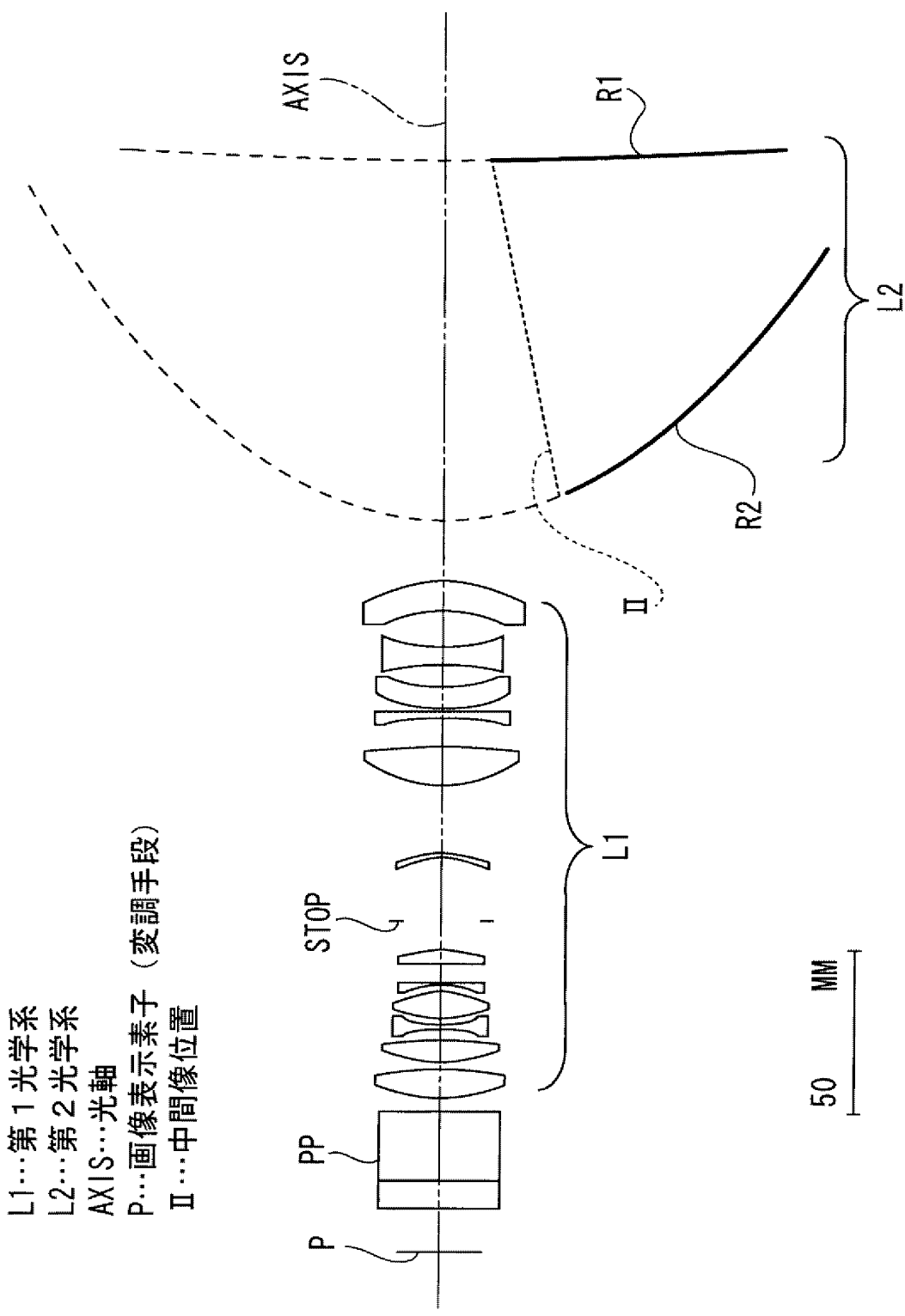
【 0 1 1 5 】

L 1 … 第 1 光学系、L 2 … 第 2 光学系、A X I S … 光軸、P … 画像表示素子 (変調手段) 、I I … 中間像位置、S … スクリーン

L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
P…画像表示素子 (変調手段)
II…中間像位置
S…スクリーン

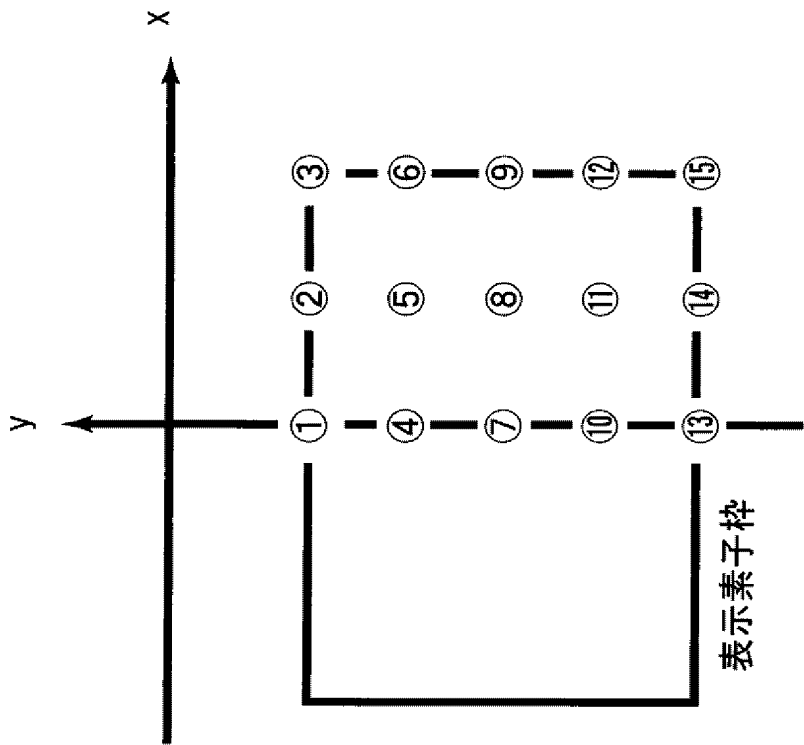


【図 2】



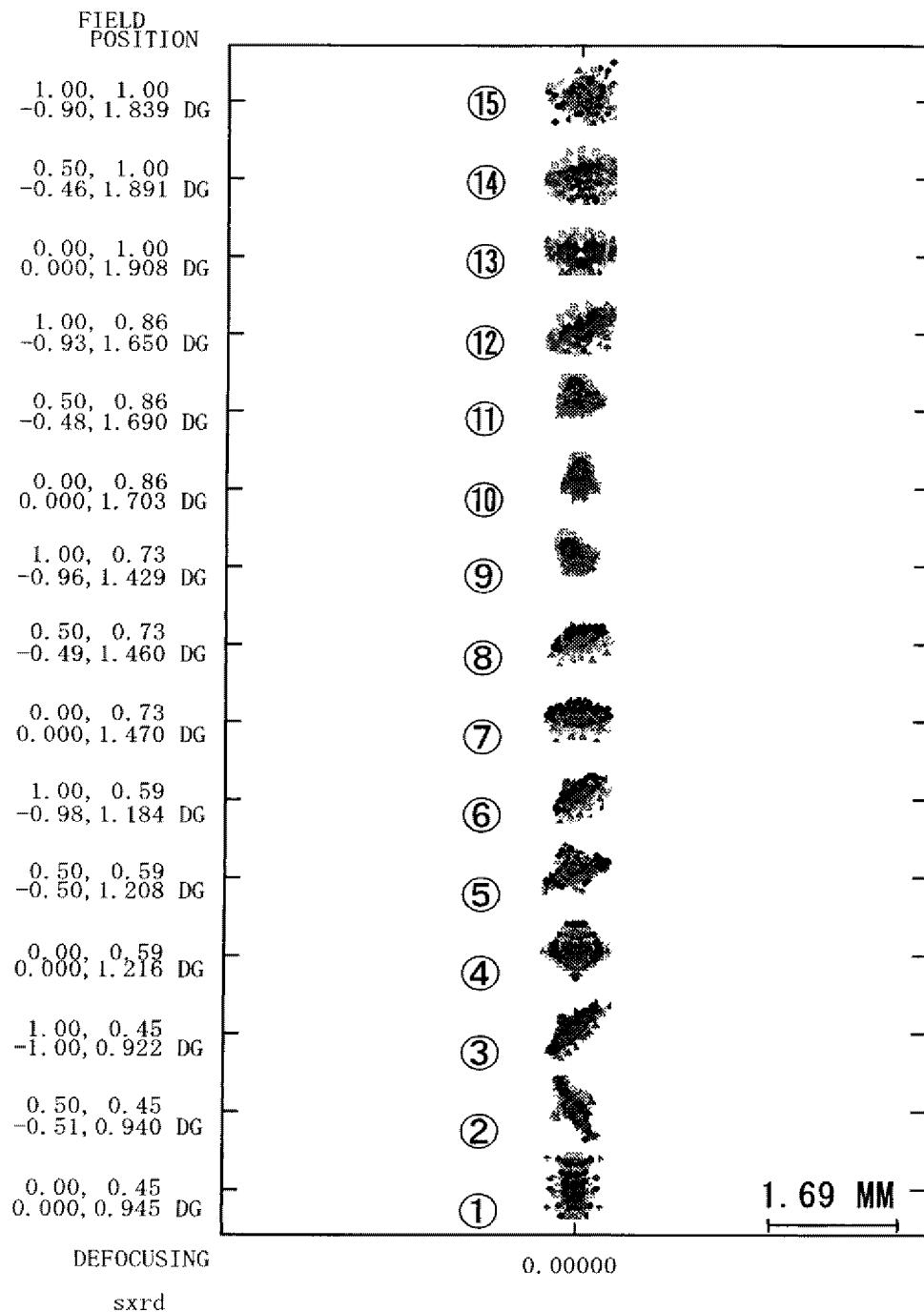
表示素子上の座標

	x	y
①	0.00	-6.20
②	3.36	-6.20
③	6.72	-6.20
④	0.00	-8.09
⑤	3.36	-8.09
⑥	6.72	-8.09
⑦	0.00	-9.98
⑧	3.36	-9.98
⑨	6.72	-9.98
⑩	0.00	-11.87
⑪	3.36	-11.87
⑫	6.72	-11.87
⑬	0.00	-13.76
⑭	3.36	-13.76
⑮	6.72	-13.76

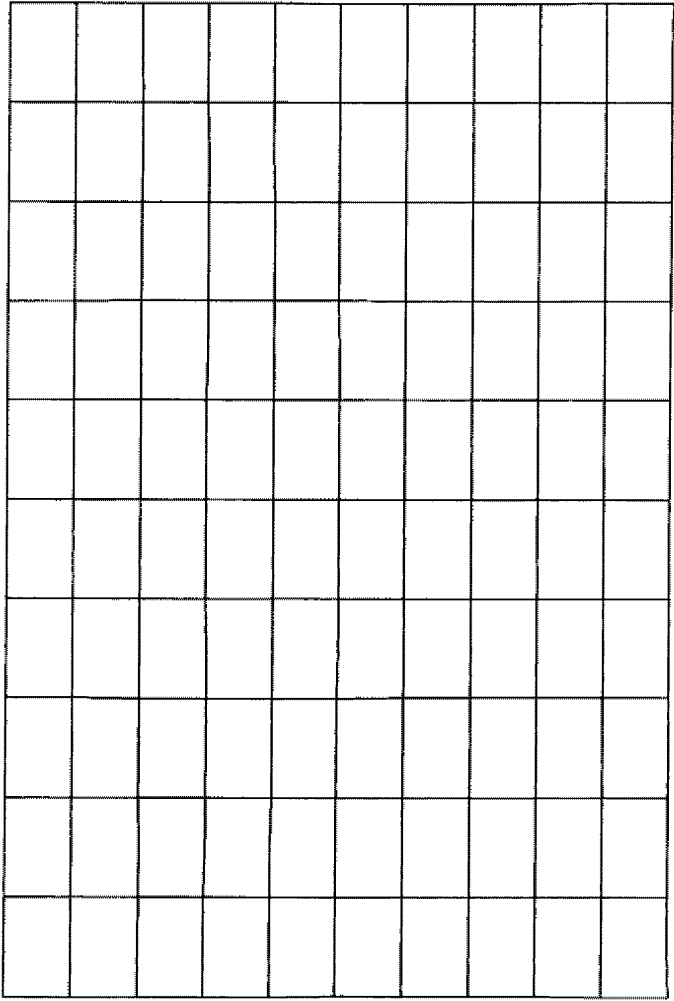


【図 4】

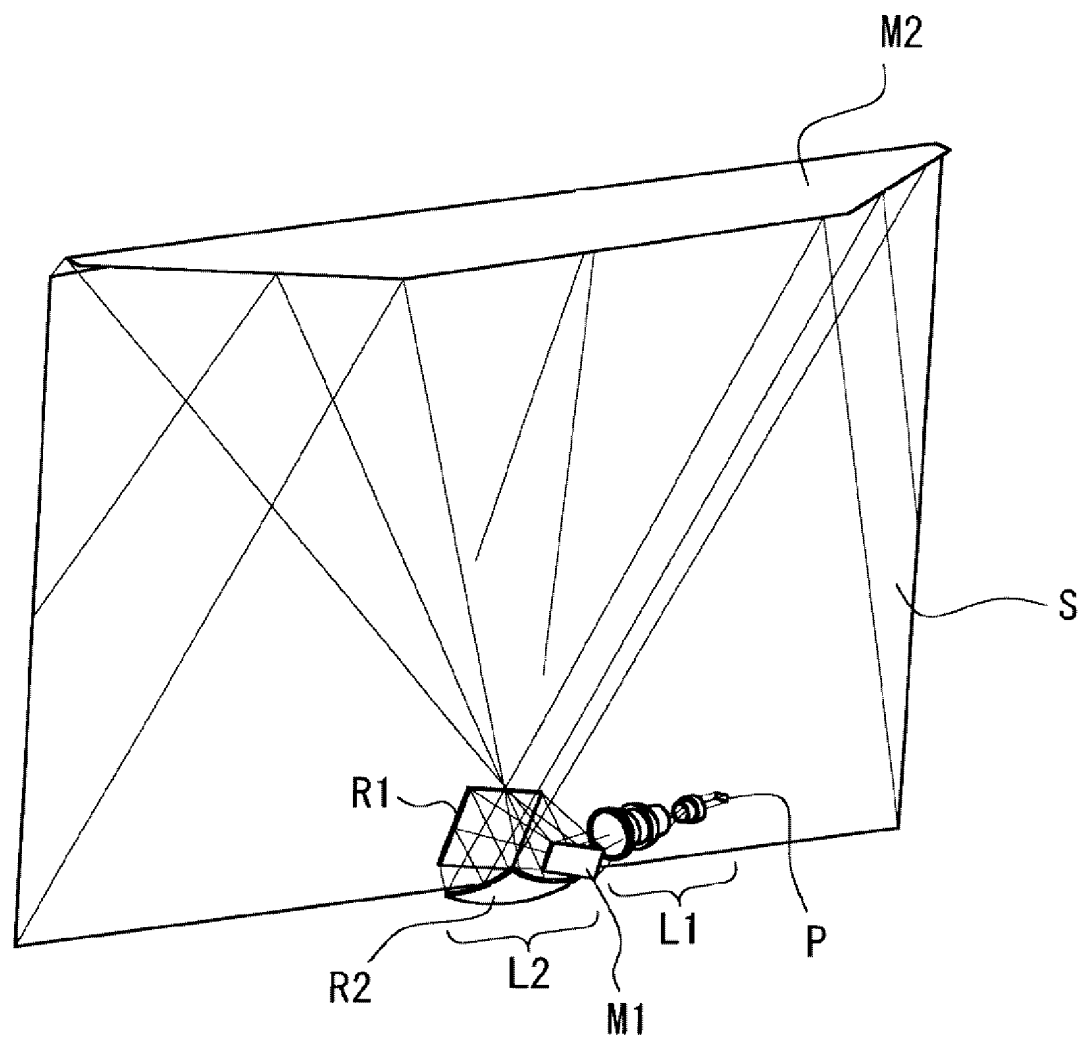
スポットダイアグラム(白色) スケール1.69mm(表示素子上 $7\mu\text{m} \times 2$ 相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0.0)は光軸
 ●使用波長 656.3nm, 620.0nm, 587.6nm, 546.1nm, 460.0nm, 435.8nm



TV歪曲図
●評価面:スクリーン上



【図 6】

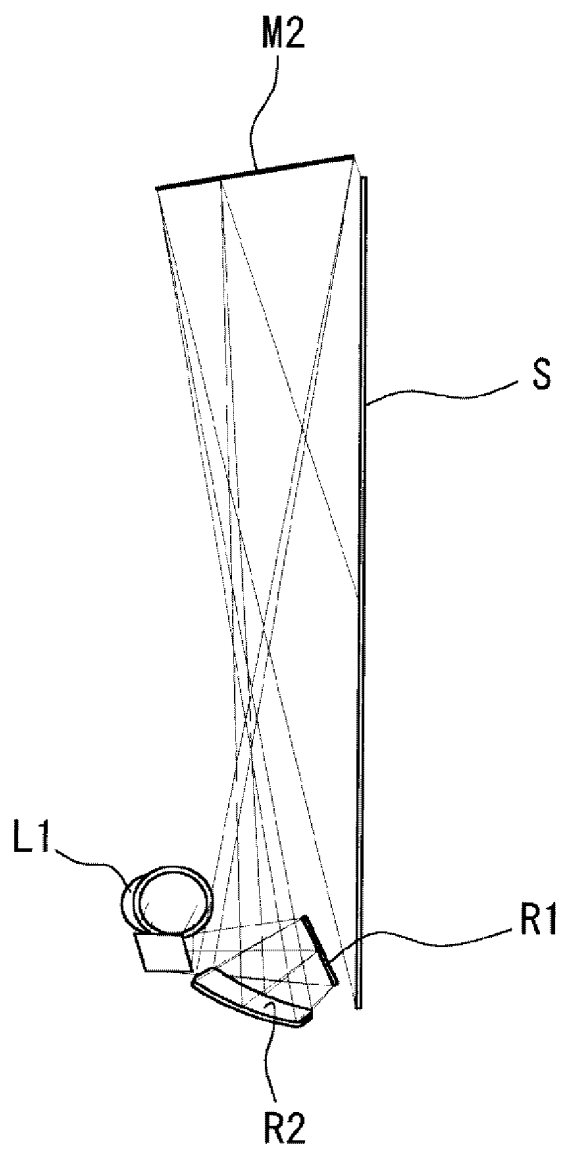


L1 . . . 第1光学系

L2 . . . 第2光学系

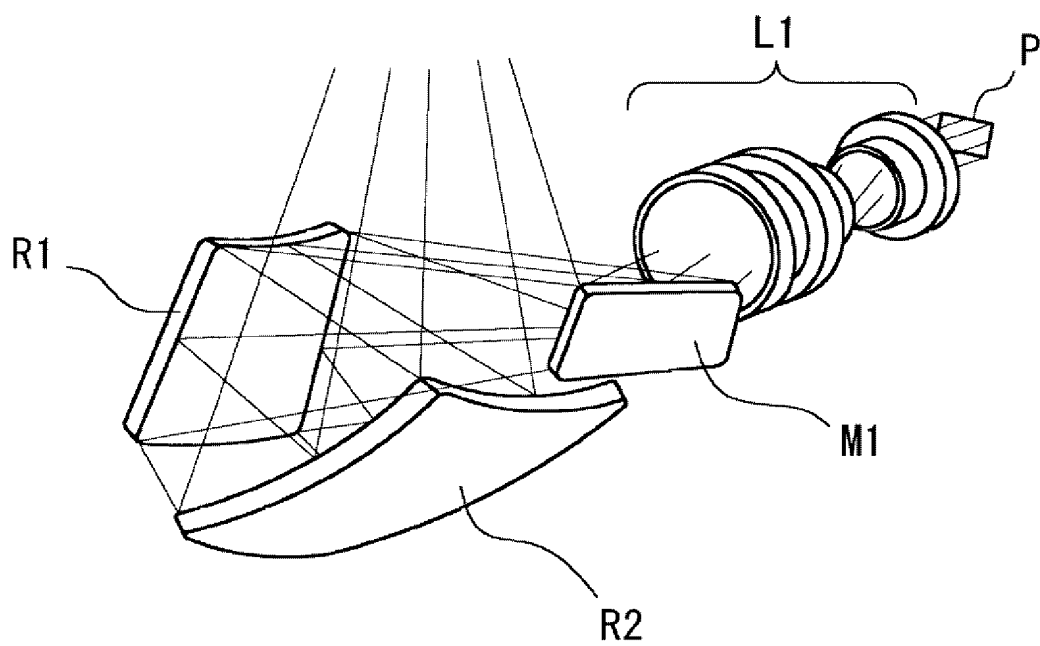
P . . . 画像表示素子（変調手段）

S . . . スクリーン



L1 . . . 第1光学系

S . . . スクリーン

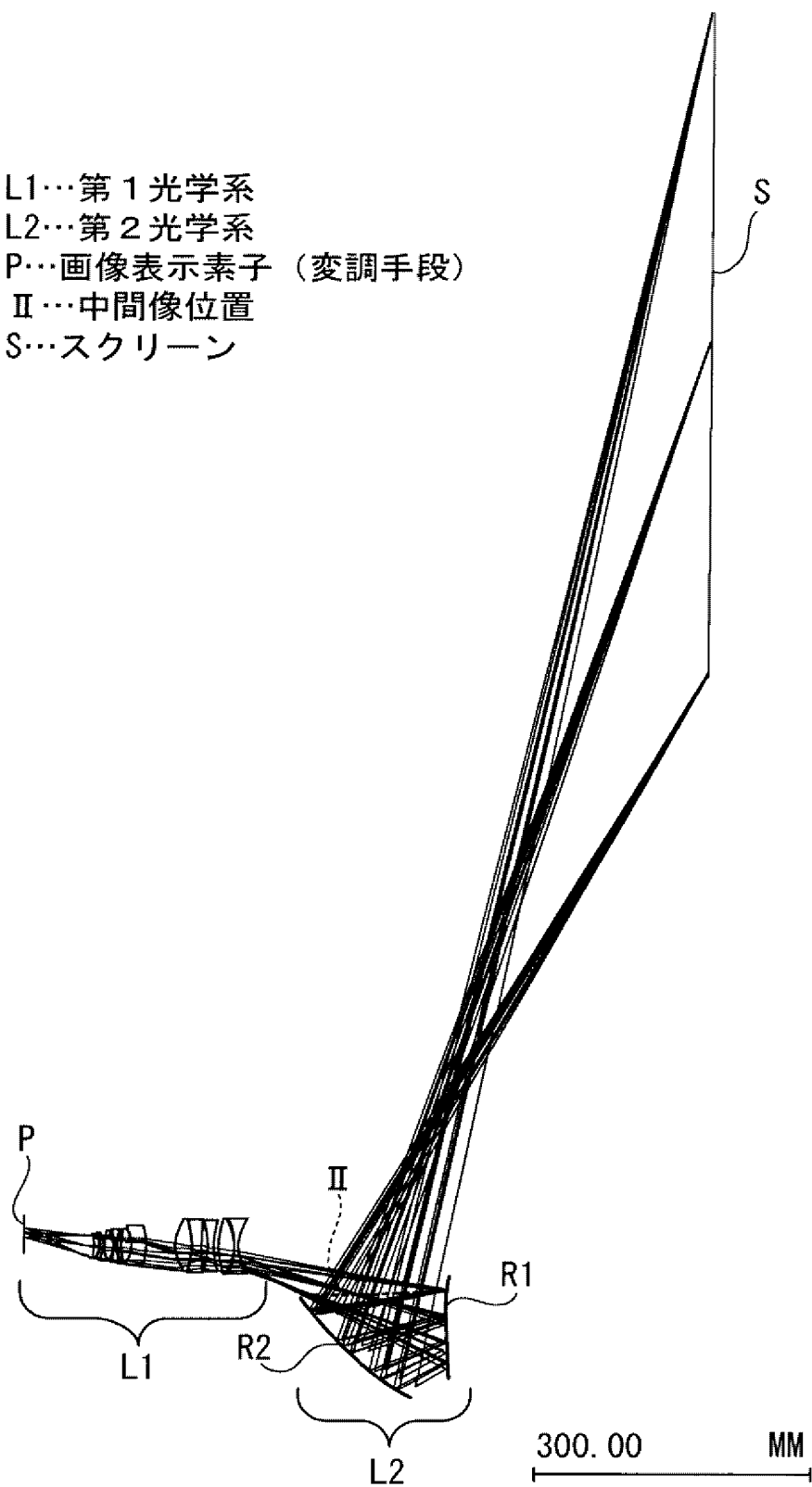


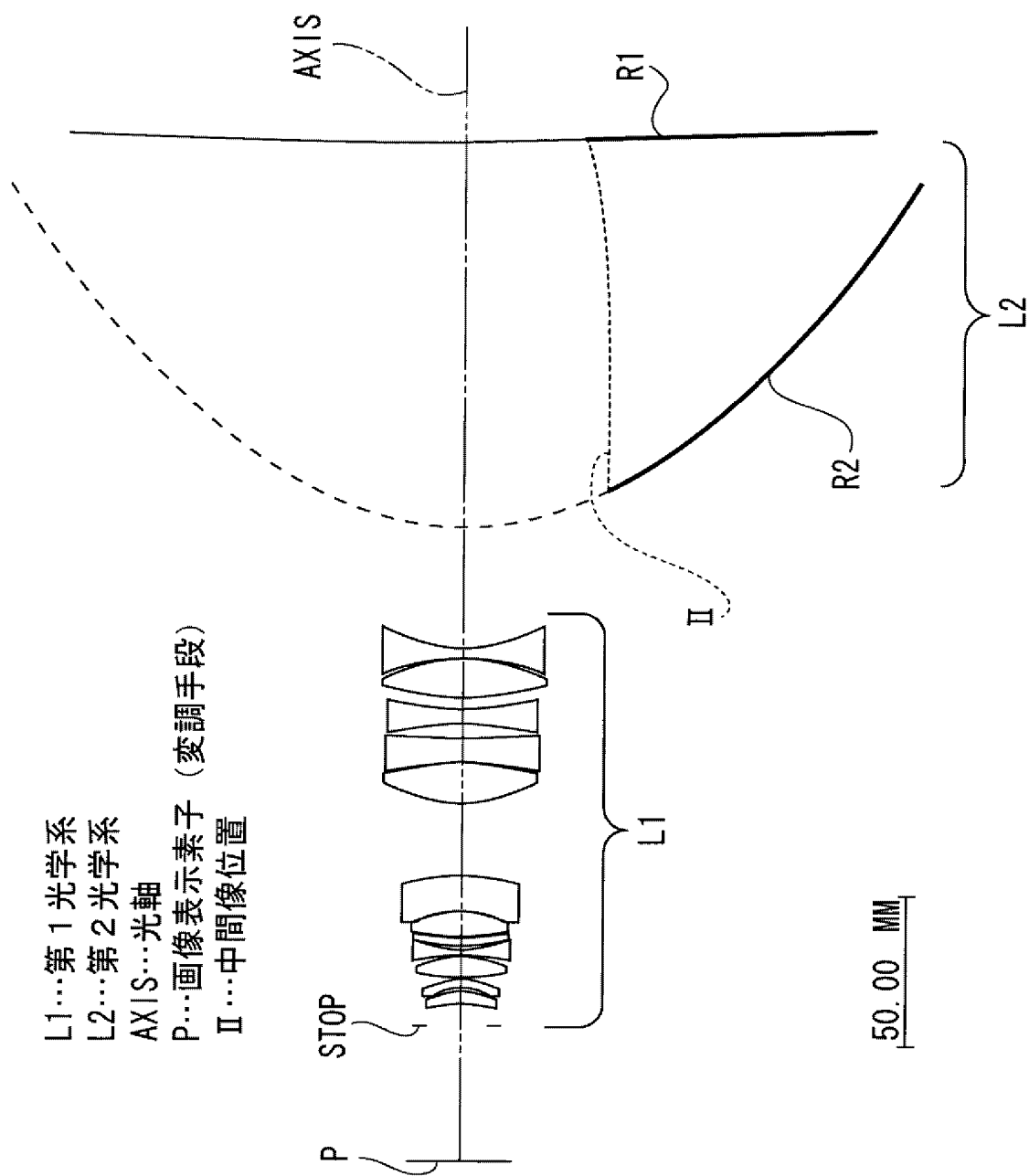
L1 . . . 第1光学系

P . . . 画像表示素子（変調手段）

【図 9】

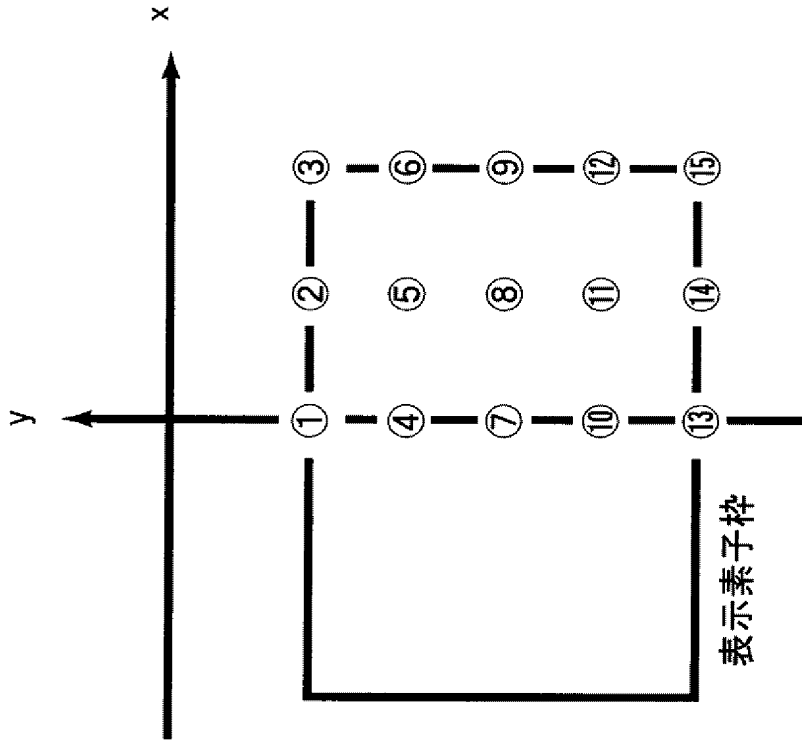
L1…第1光学系
L2…第2光学系
P…画像表示素子（変調手段）
Ⅱ…中間像位置
S…スクリーン



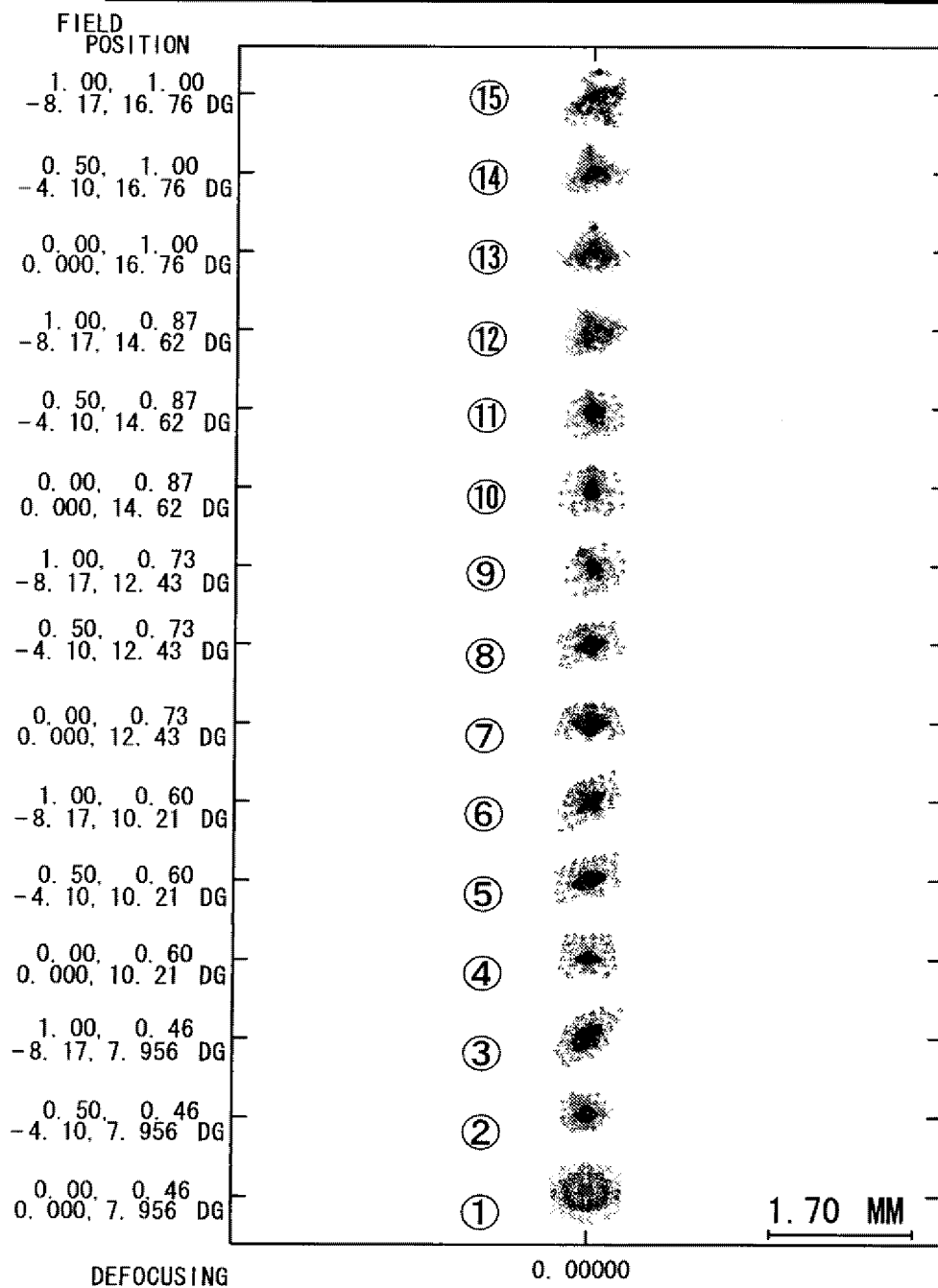


表示素子上の座標

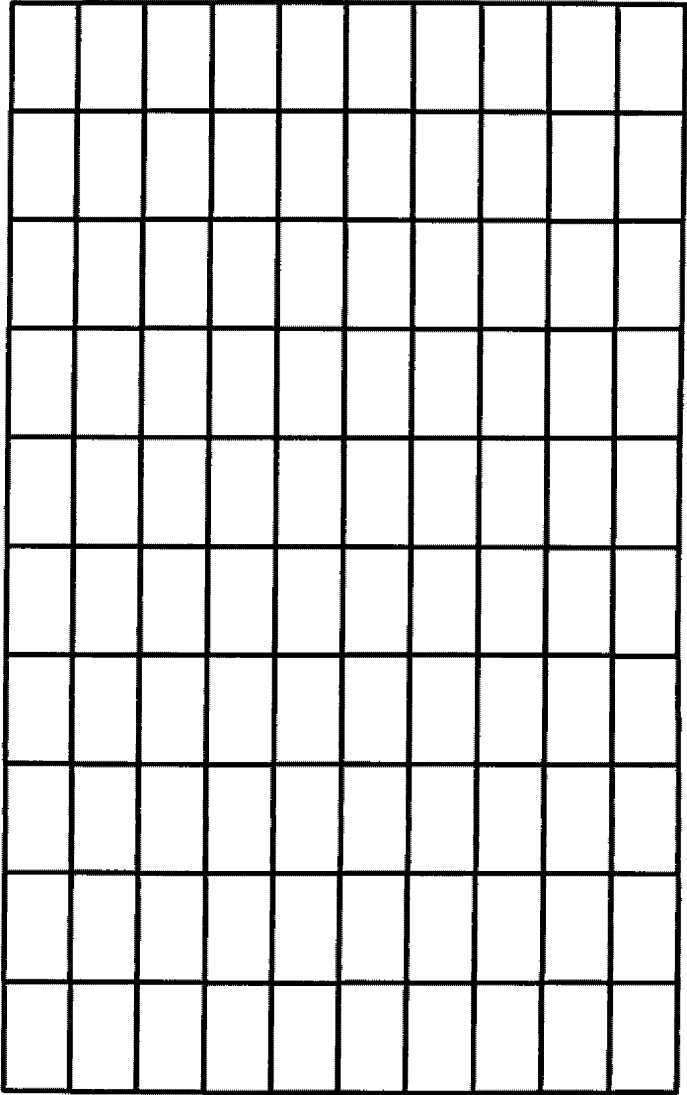
	x	y
①	0.00	-7.55
②	3.87	-7.55
③	7.75	-7.55
④	0.00	-9.73
⑤	3.87	-9.73
⑥	7.75	-9.73
⑦	0.00	-11.91
⑧	3.87	-11.91
⑨	7.75	-11.91
⑩	0.00	-14.08
⑪	3.87	-14.08
⑫	7.75	-14.08
⑬	0.00	-16.26
⑭	3.87	-16.26
⑮	7.75	-16.26



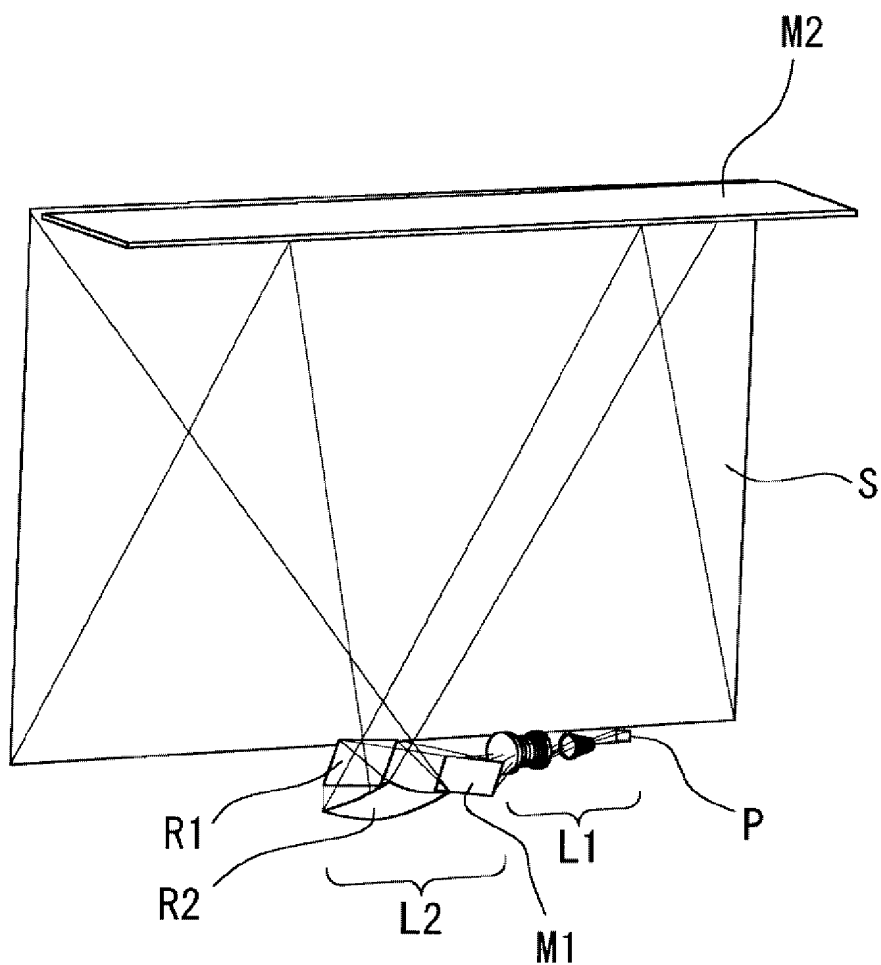
スポットダイアグラム(白色) スケール1.7mm(表示素子上12 μ m \times 2相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0.0)は光軸
 ●使用波長 656.3nm, 620.0nm, 587.6nm, 546.1nm, 460.0nm, 435.8nm



TV歪曲図
●評価面：スクリーン上



【図 1 4】

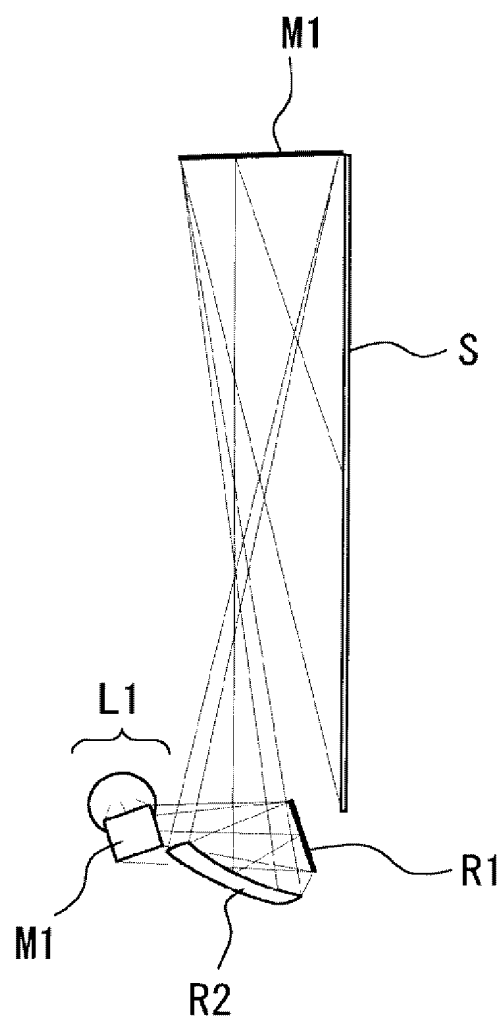


L1 . . . 第1光学系

L2 . . . 第2光学系

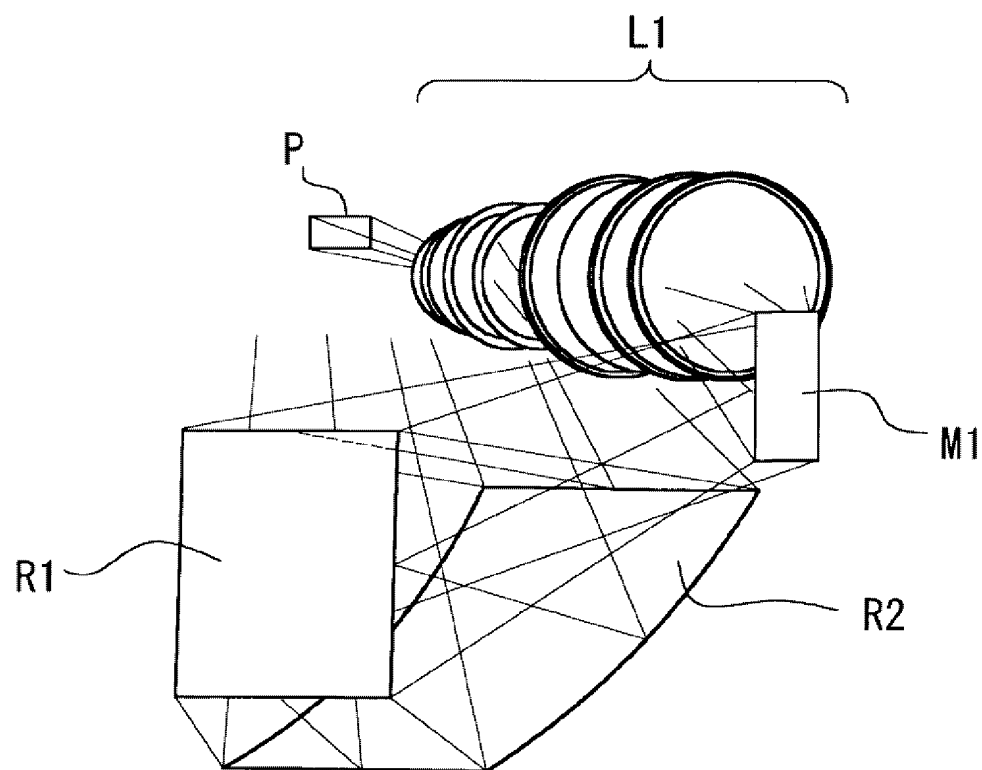
P . . . 画像表示素子（変調手段）

S . . . スクリーン



L1 . . . 第1光学系

S . . . スクリーン

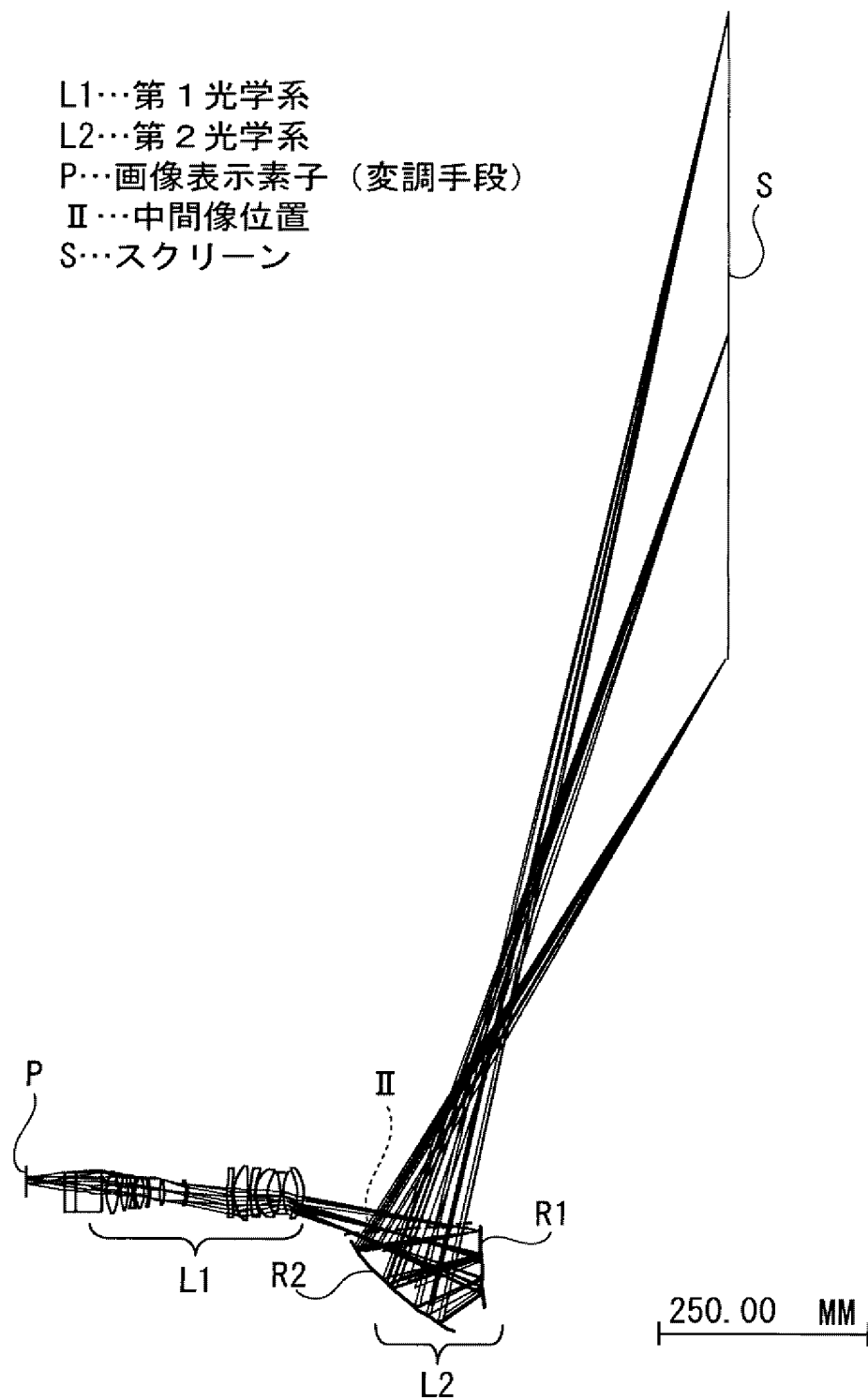


L1 . . . 第1光学系

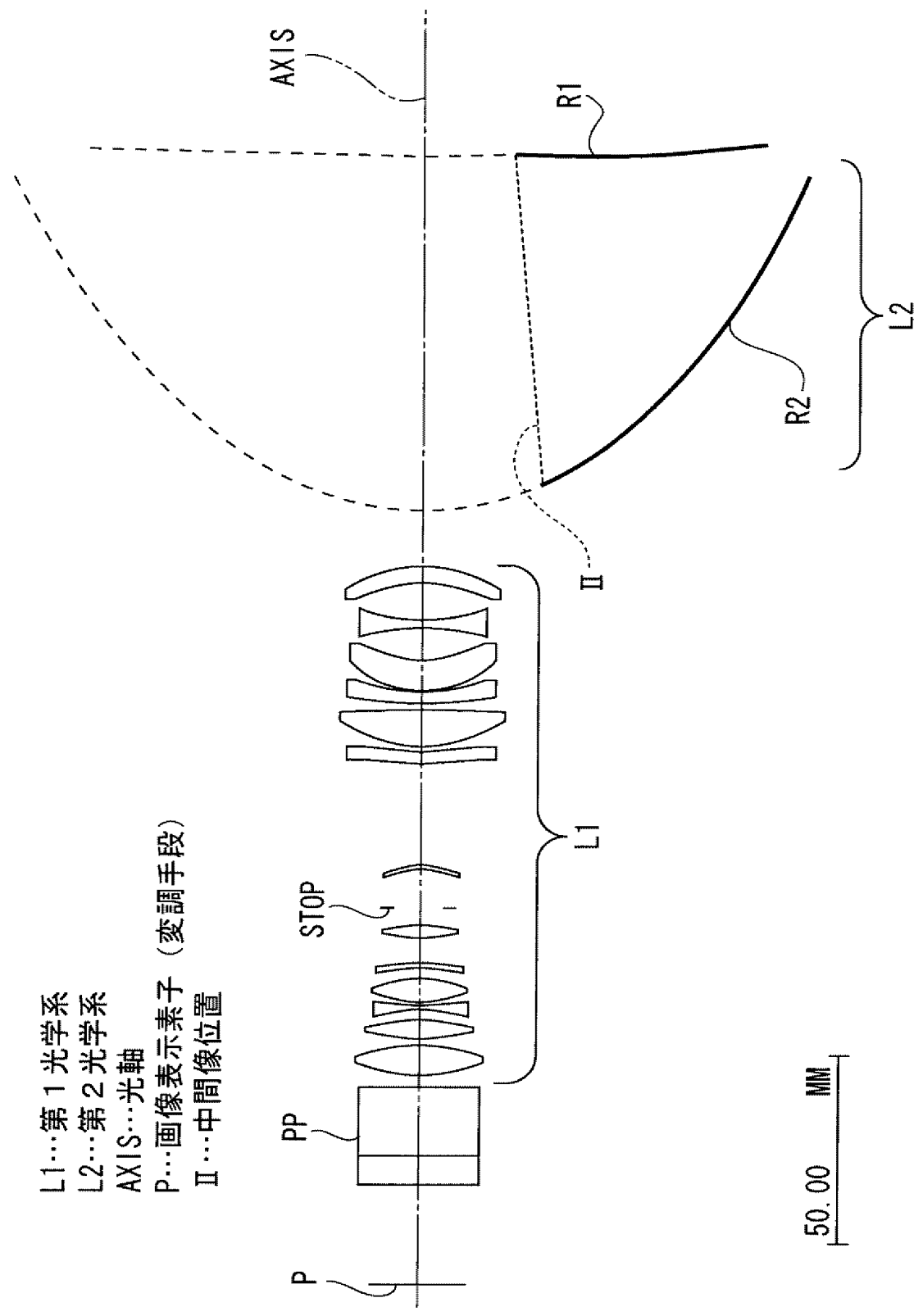
P . . . 画像表示素子（変調手段）

【図 17】

L1…第1光学系
L2…第2光学系
P…画像表示素子（変調手段）
II…中間像位置
S…スクリーン



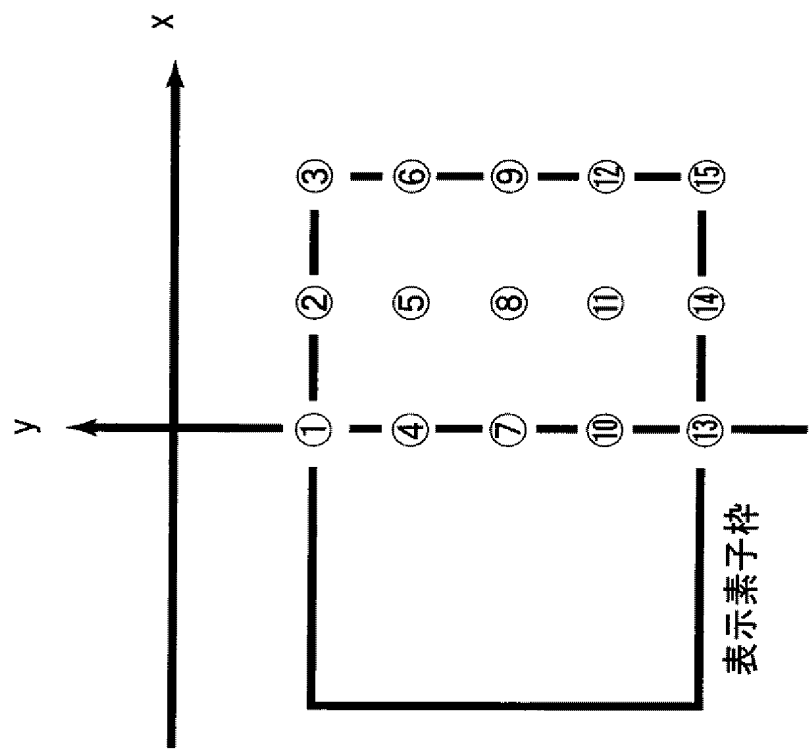
L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
AXIS…光軸
P…画像表示素子 (変調手段)
II…中間像位置



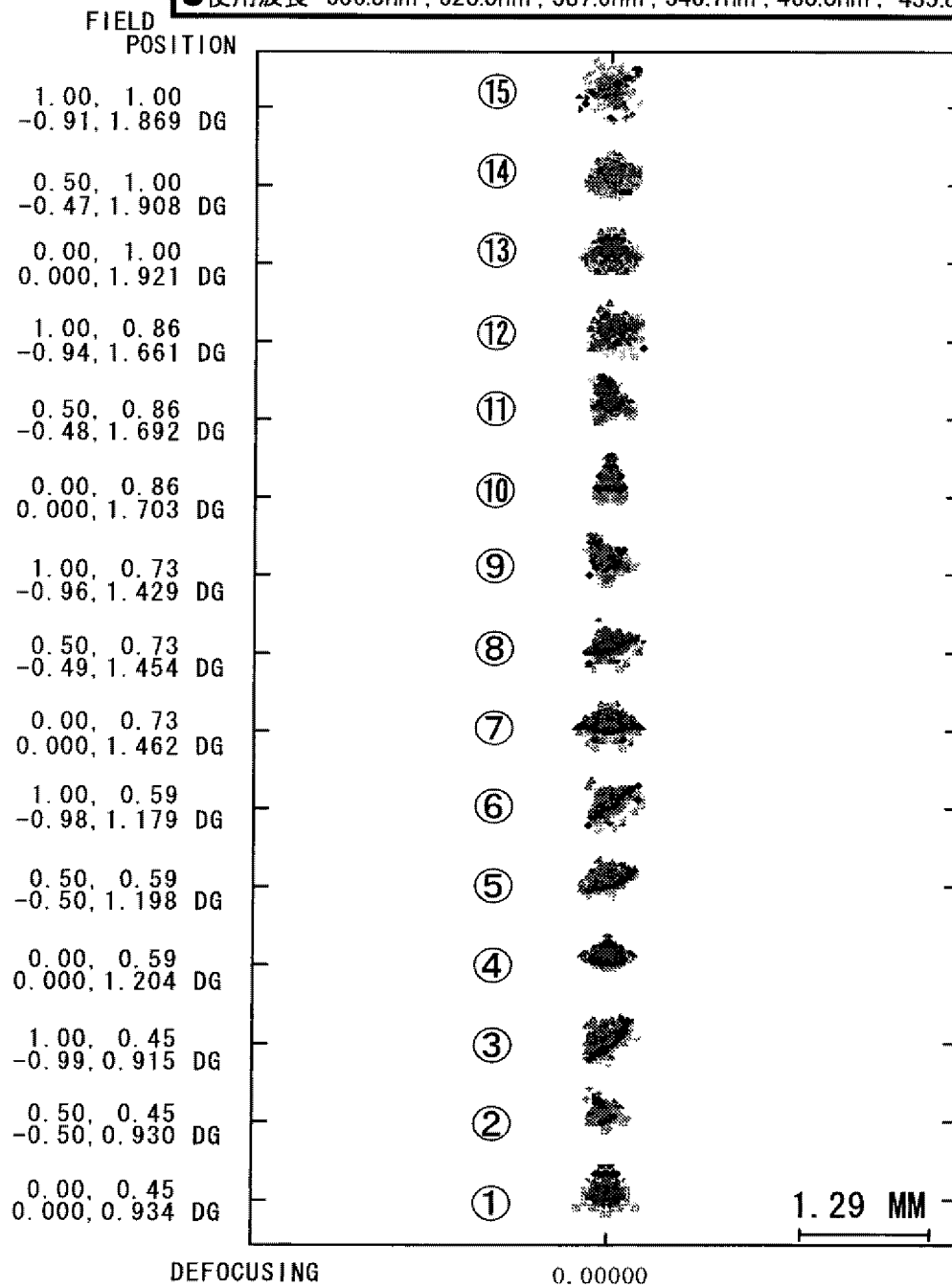
50.00 mm

表示素子上の座標

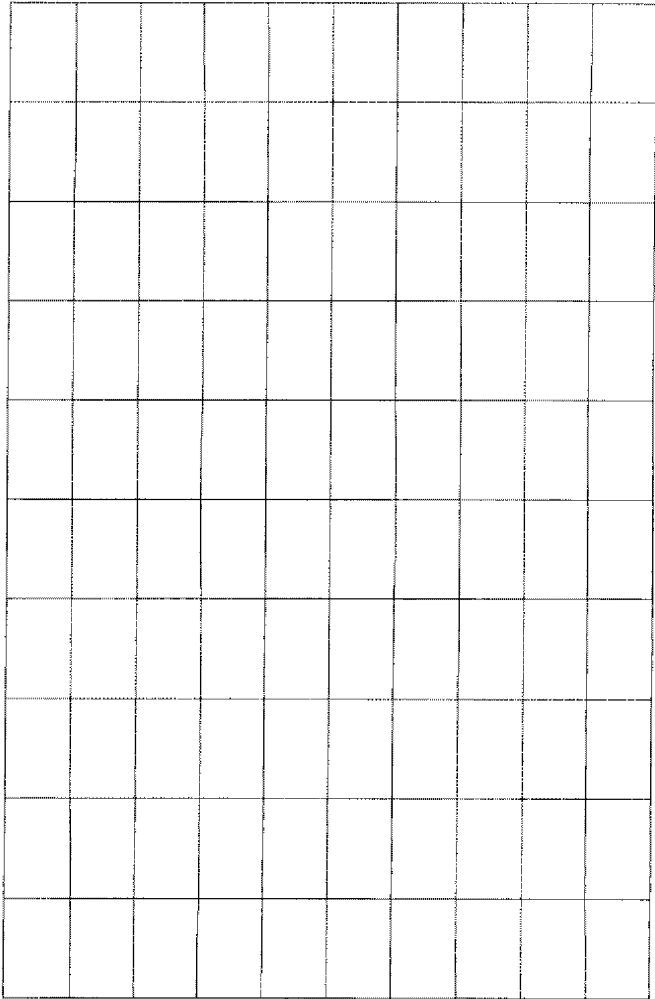
	x	y
①	0.00	-6.20
②	3.36	-6.20
③	6.72	-6.20
④	0.00	-8.09
⑤	3.36	-8.09
⑥	6.72	-8.09
⑦	0.00	-9.98
⑧	3.36	-9.98
⑨	6.72	-9.98
⑩	0.00	-11.87
⑪	3.36	-11.87
⑫	6.72	-11.87
⑬	0.00	-13.76
⑭	3.36	-13.76
⑮	6.72	-13.76



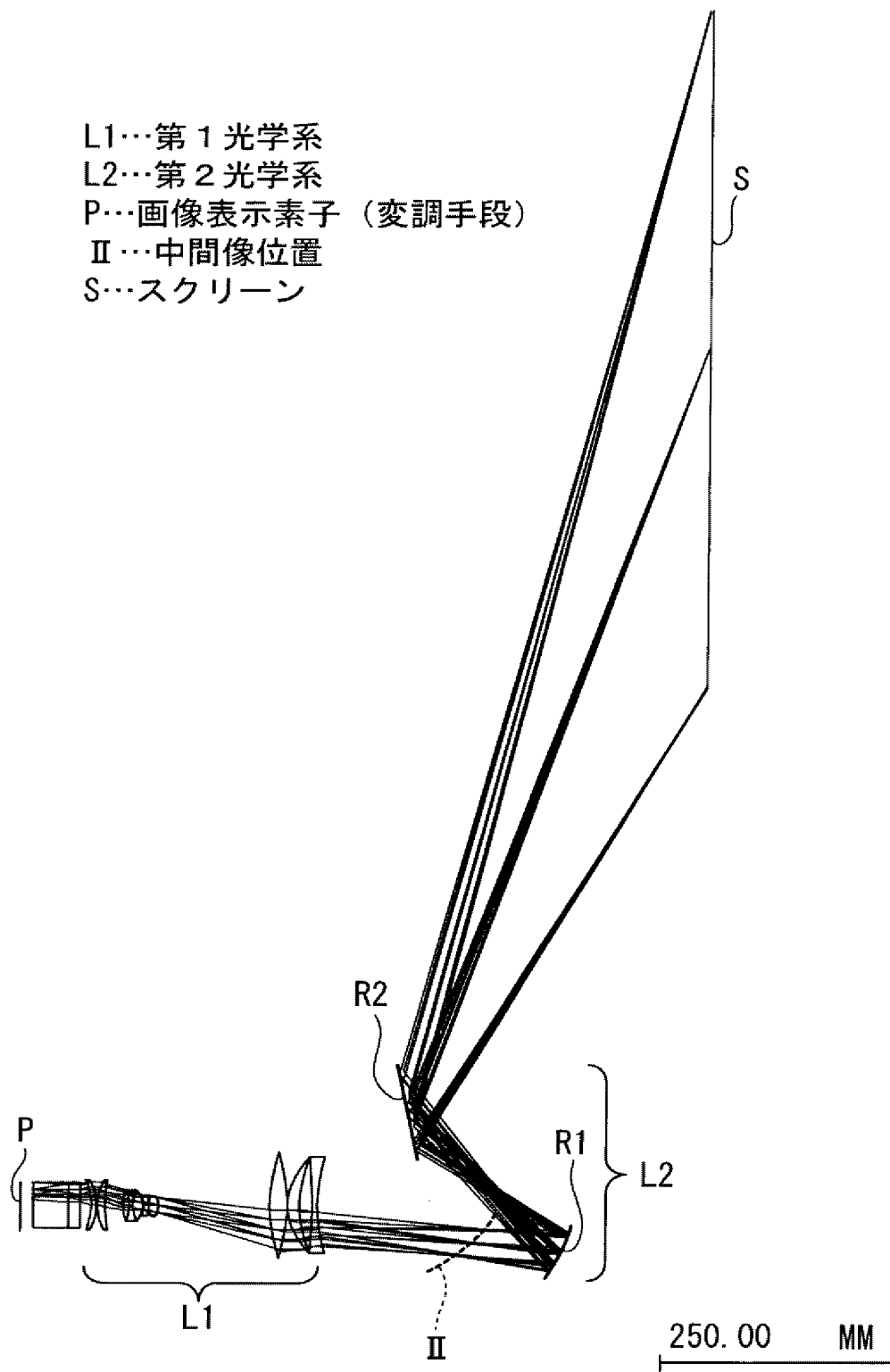
スポットダイアグラム(白色) スケール1.29mm(表示素子上 $7\mu\text{m} \times 2$ 相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0.0)は光軸
 ●使用波長 656.3nm, 620.0nm, 587.6nm, 546.1nm, 460.0nm, 435.8nm



TV歪曲図
●評価面:スクリーン上

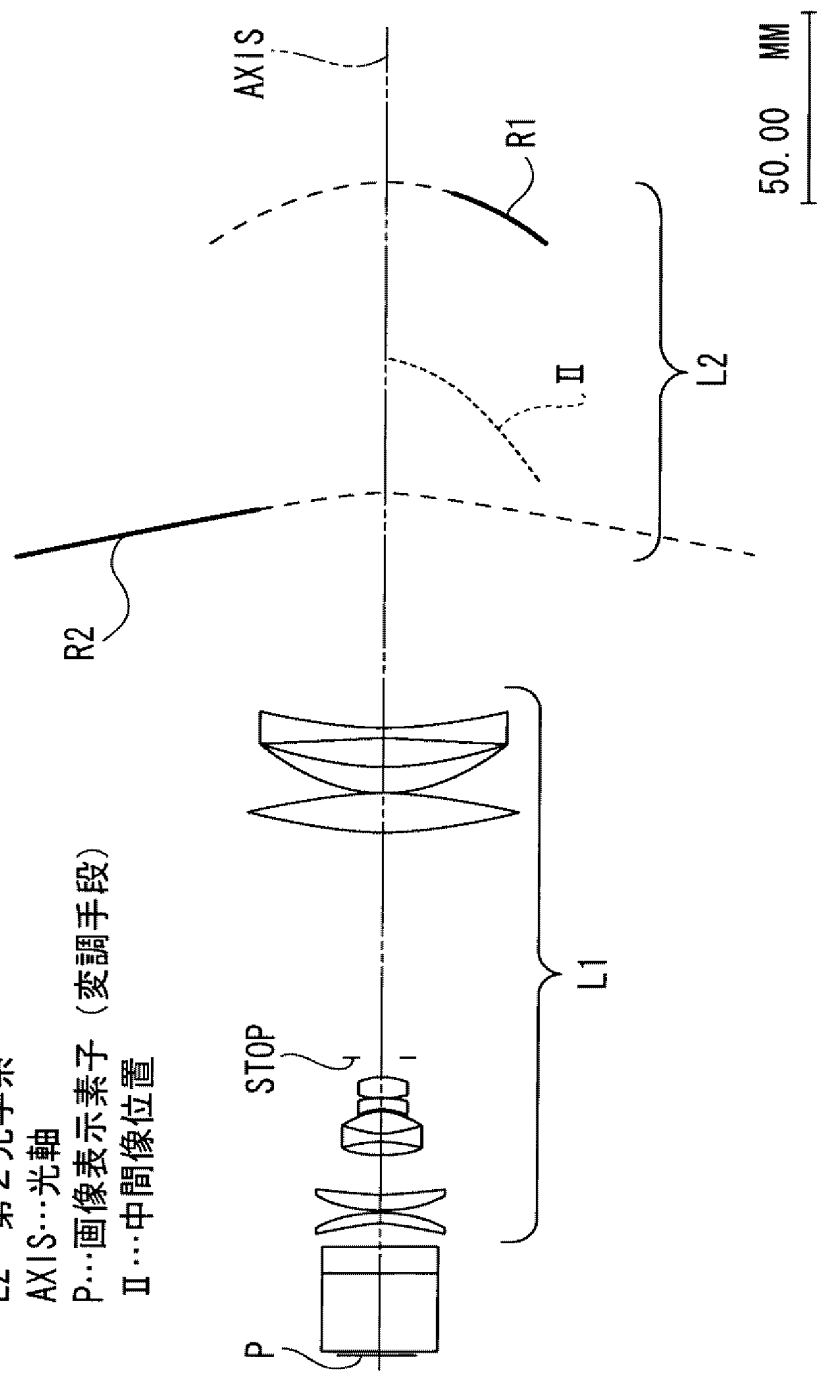


【図 2 2】



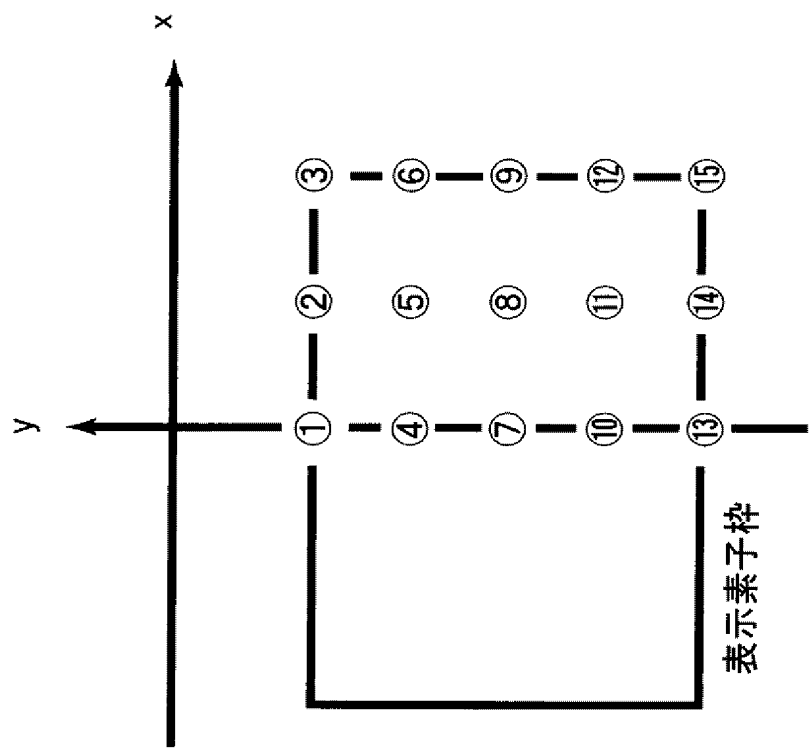
【図 23】

L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
AXIS…光軸
P…画像表示素子 (変調手段)
II…中間像位置

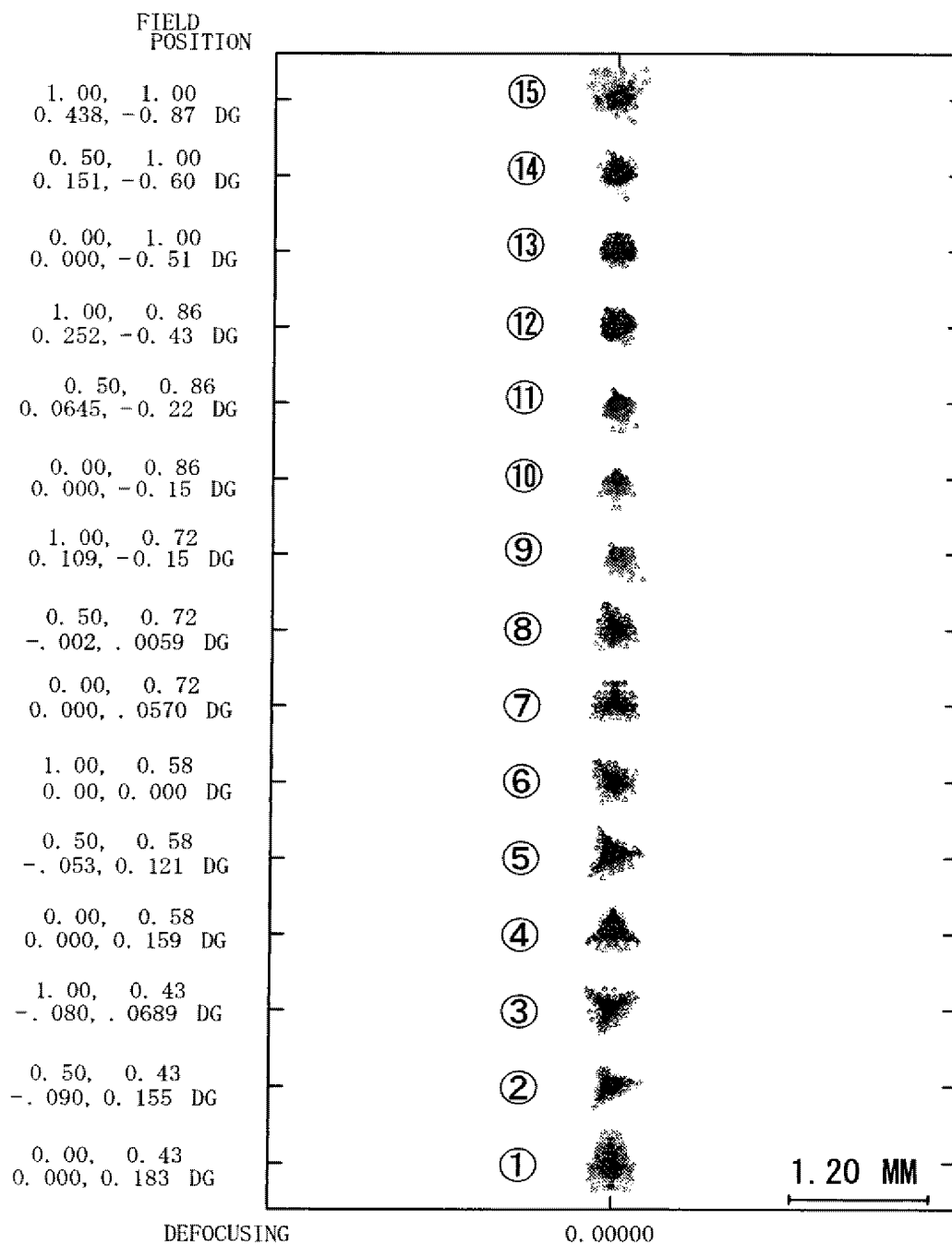


表示素子上の座標

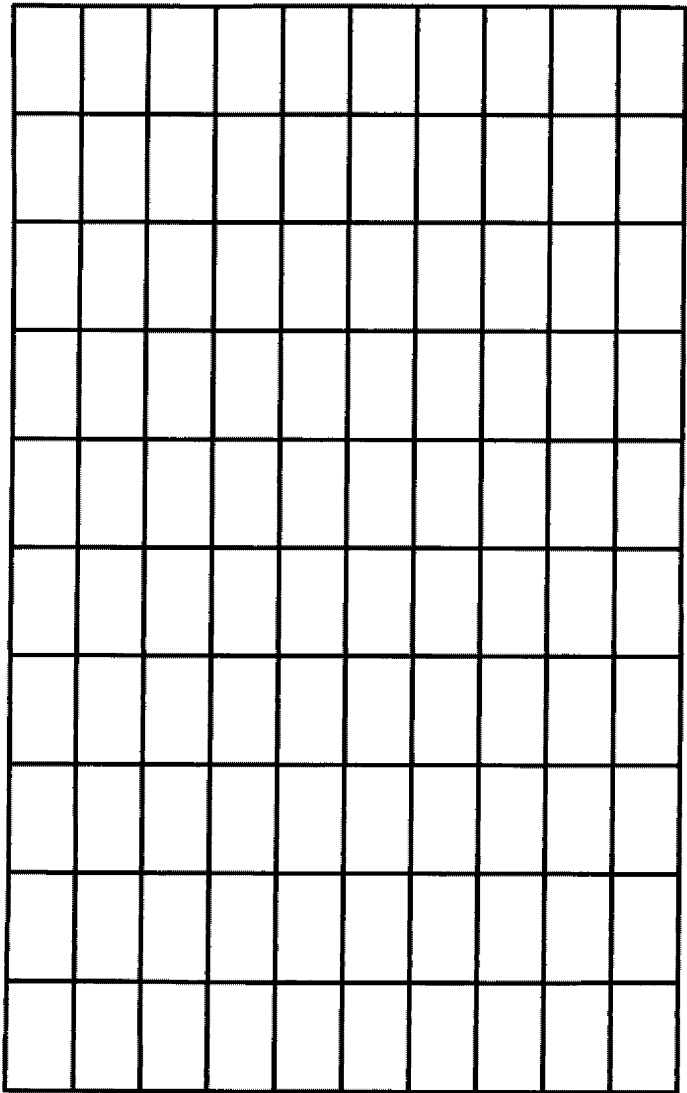
	x	y
①	0.00	-5.81
②	3.38	-5.81
③	6.75	-5.81
④	0.00	-7.71
⑤	3.38	-7.71
⑥	6.75	-7.71
⑦	0.00	-9.61
⑧	3.38	-9.61
⑨	6.75	-9.61
⑩	0.00	-11.87
⑪	3.38	-11.51
⑫	6.75	-11.51
⑬	0.00	-13.41
⑭	3.38	-13.41
⑮	6.75	-13.41



スポットダイアグラム(白色) スケール1.2mm(表示素子上 $7\mu\text{m} \times 2$ 相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0.0)は光軸

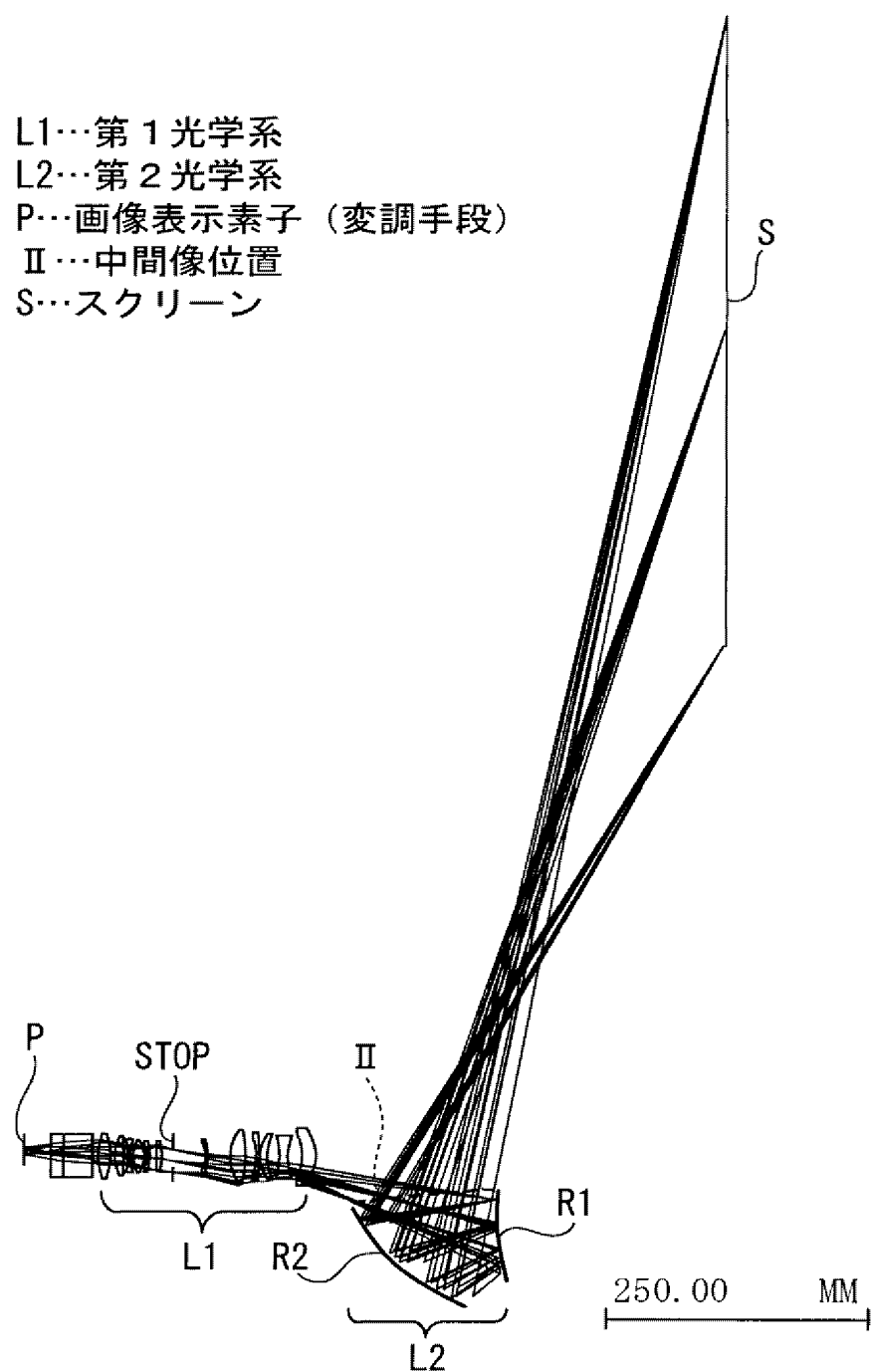


TV歪曲図
●評価面：スクリーン上

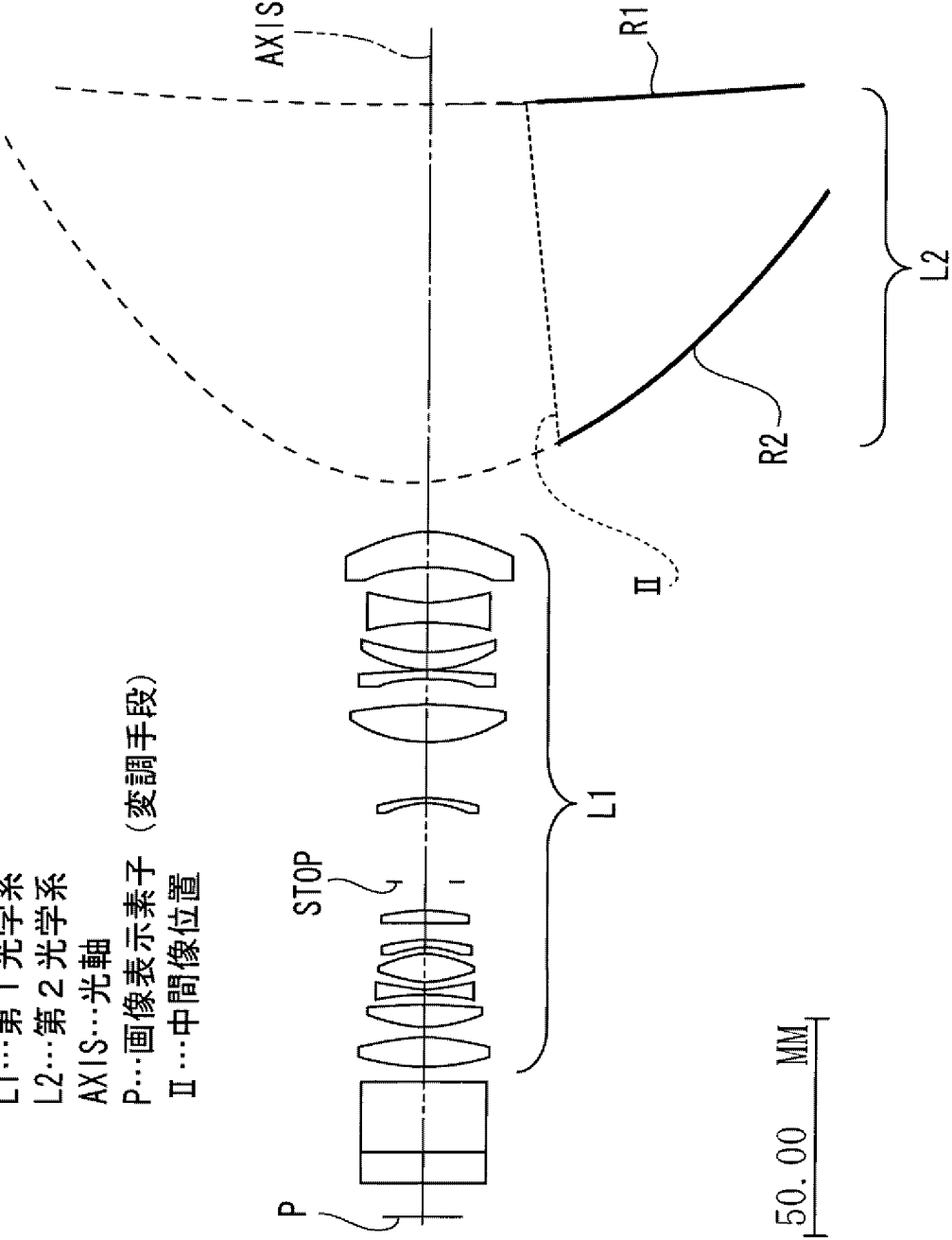


【図 2 7】

L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
P…画像表示素子 (変調手段)
II…中間像位置
S…スクリーン

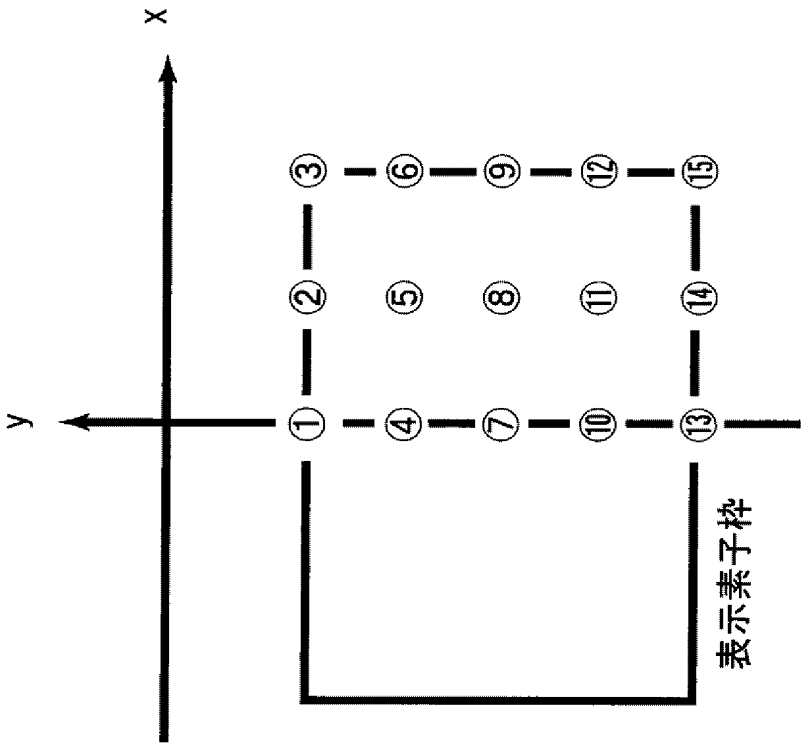


L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
AXIS…光軸
P…画像表示素子 (変調手段)
II ……中間像位置

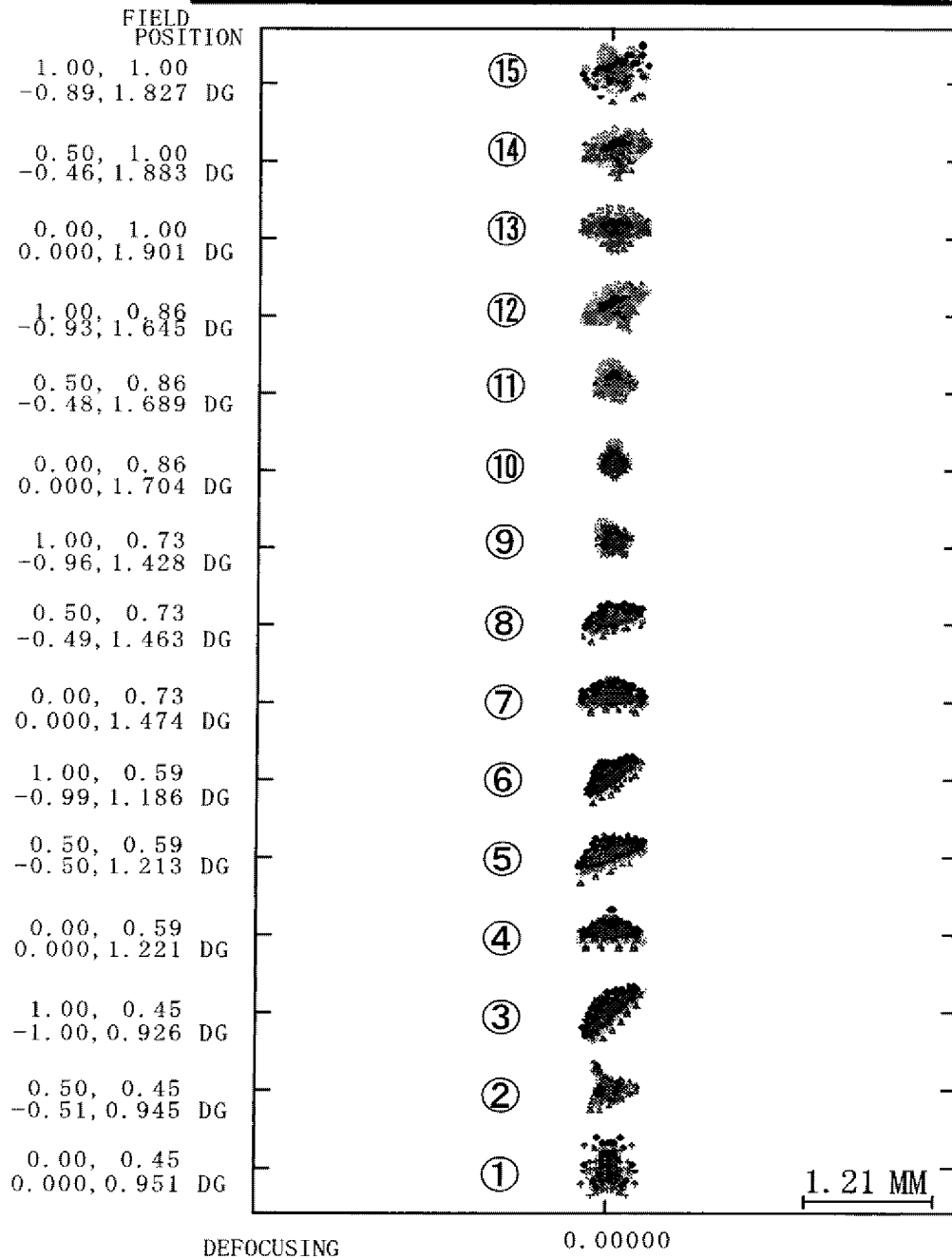


表示素子上の座標

	x	y
①	0.00	-6.20
②	3.36	-6.20
③	6.72	-6.20
④	0.00	-8.09
⑤	3.36	-8.09
⑥	6.72	-8.09
⑦	0.00	-9.98
⑧	3.36	-9.98
⑨	6.72	-9.98
⑩	0.00	-11.87
⑪	3.36	-11.87
⑫	6.72	-11.87
⑬	0.00	-13.76
⑭	3.36	-13.76
⑮	6.72	-13.76

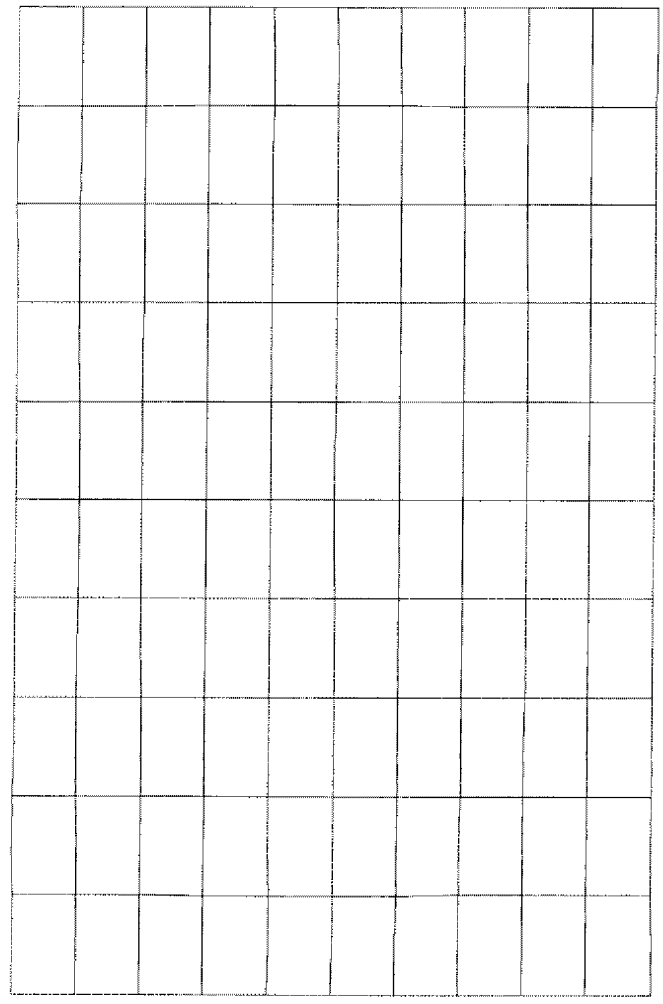


スポットダイアグラム(白色) スケール1.21mm(表示素子上7 μ m \times 2相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0.0)は光軸
 ●使用波長 656.3nm, 620.0nm, 587.6nm, 546.1nm, 460.0nm, 435.8nm



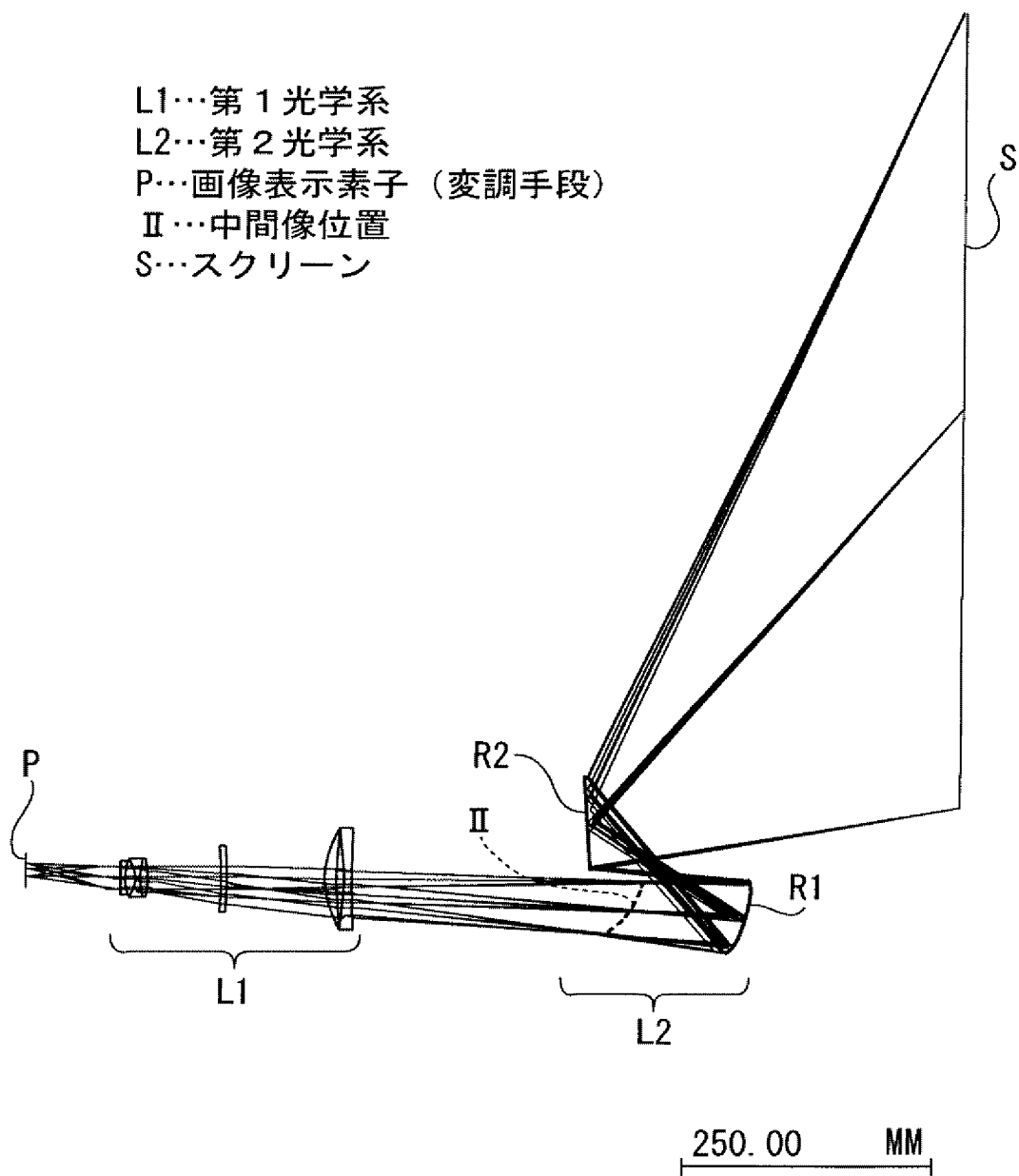
TV歪曲図

●評価面：スクリーン上

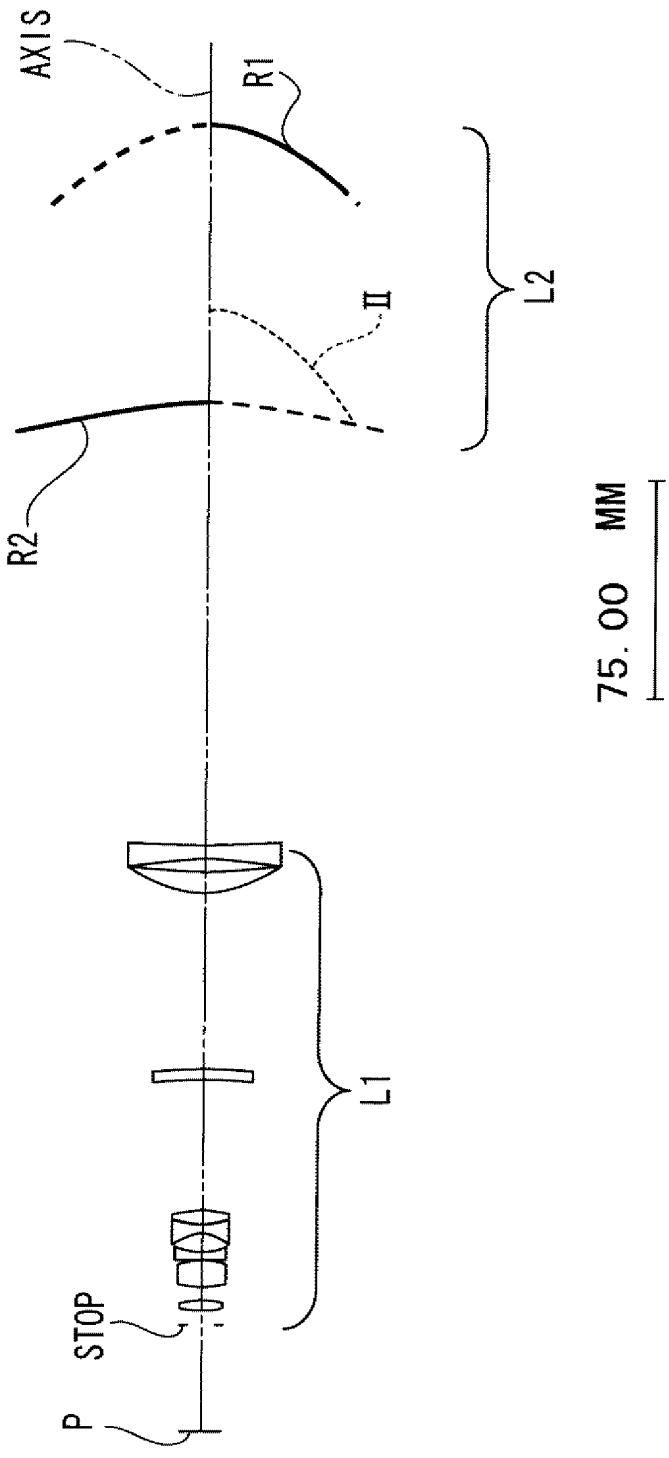


【図 3 2】

L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
P…画像表示素子（変調手段）
Ⅱ…中間像位置
S…スクリーン

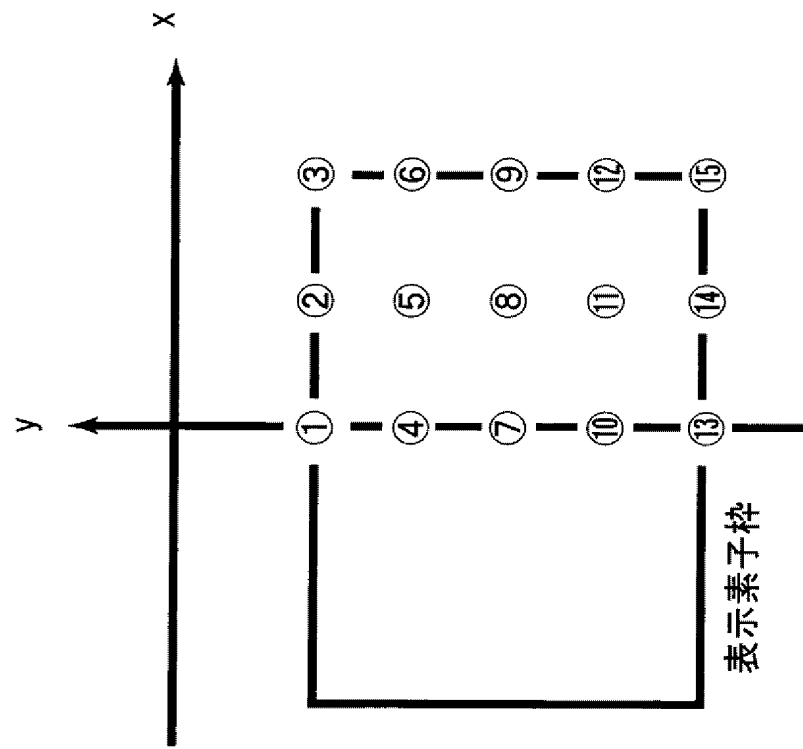


L1…第 1 光学系
L2…第 2 光学系
AXIS…光軸
P…画像表示素子 (変調手段)
II…中間像位置

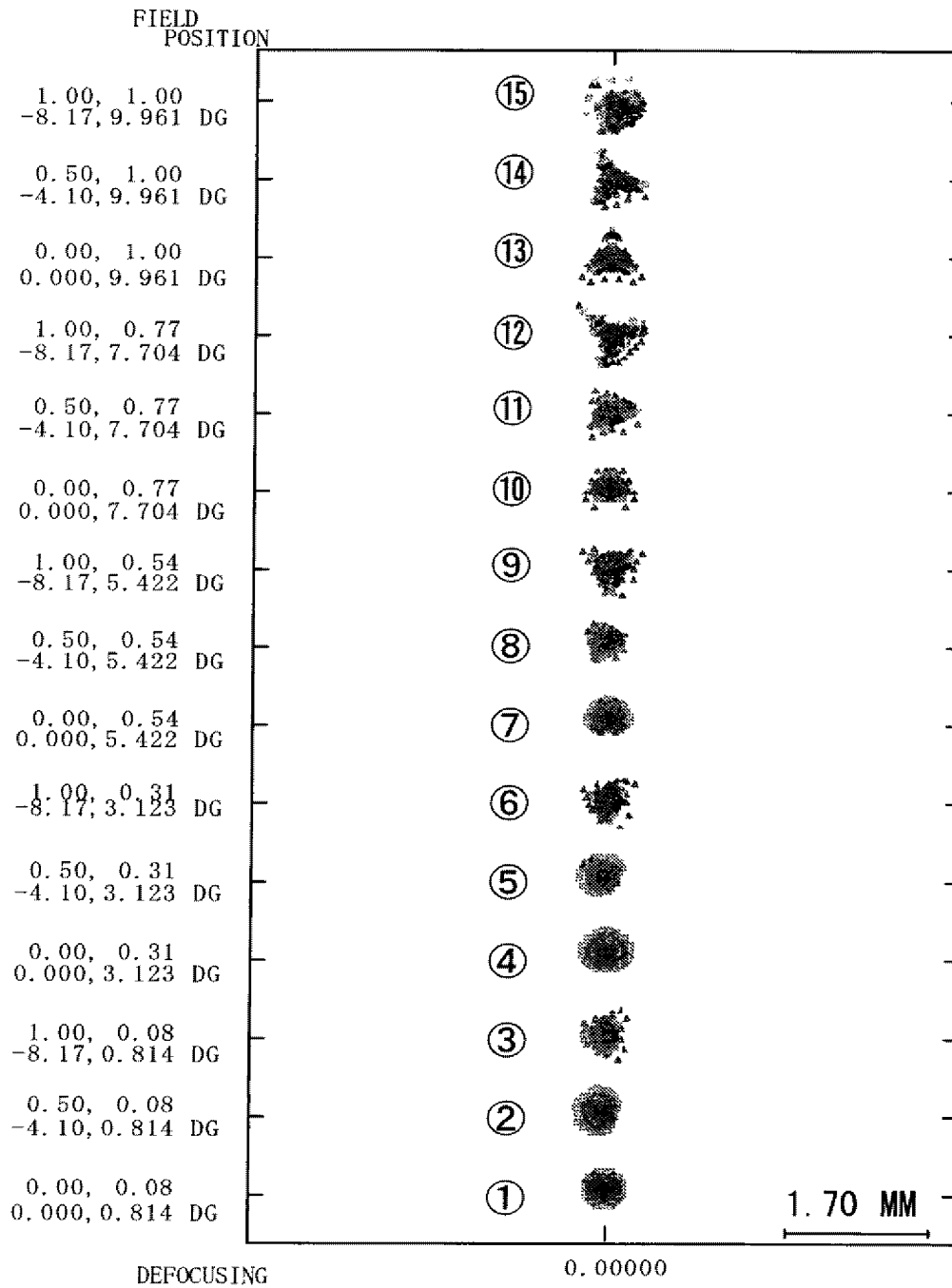


表示素子上の座標

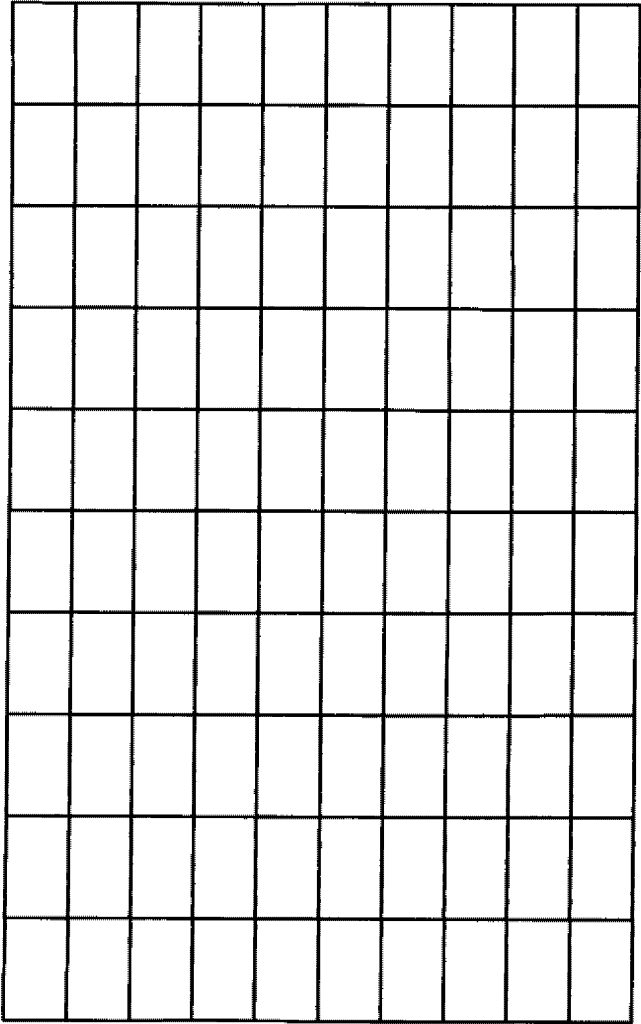
	x	y
①	0.00	-0.77
②	3.87	-0.77
③	7.75	-0.77
④	0.00	-2.95
⑤	3.87	-2.95
⑥	7.75	-2.95
⑦	0.00	-5.13
⑧	3.87	-5.13
⑨	7.75	-5.13
⑩	0.00	-7.30
⑪	3.87	-7.30
⑫	7.75	-7.30
⑬	0.00	-9.48
⑭	3.87	-9.48
⑮	7.75	-9.48



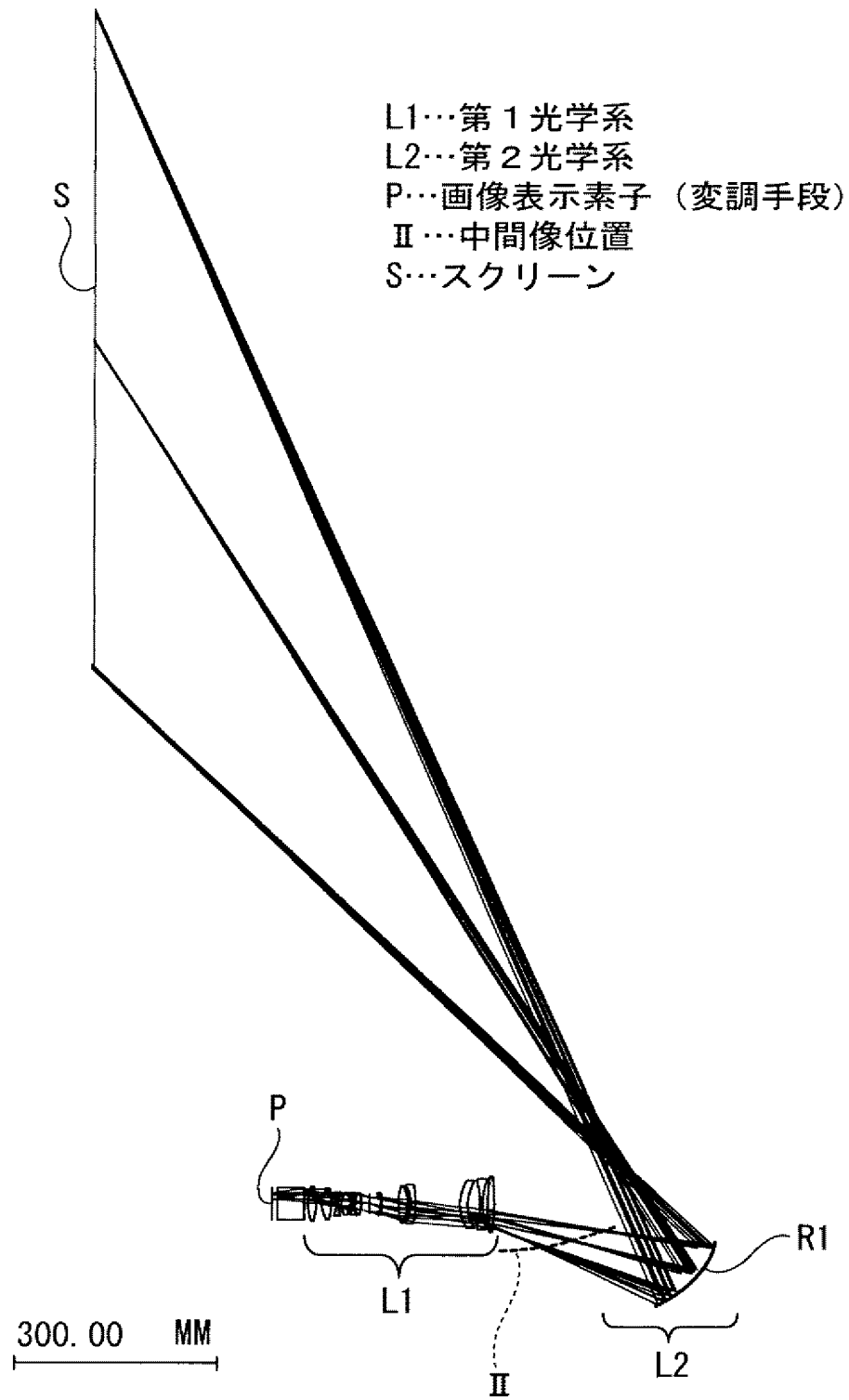
スポットダイアグラム(白色) スケール1.7mm(表示素子上12 μ m \times 2相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0.0)は光軸

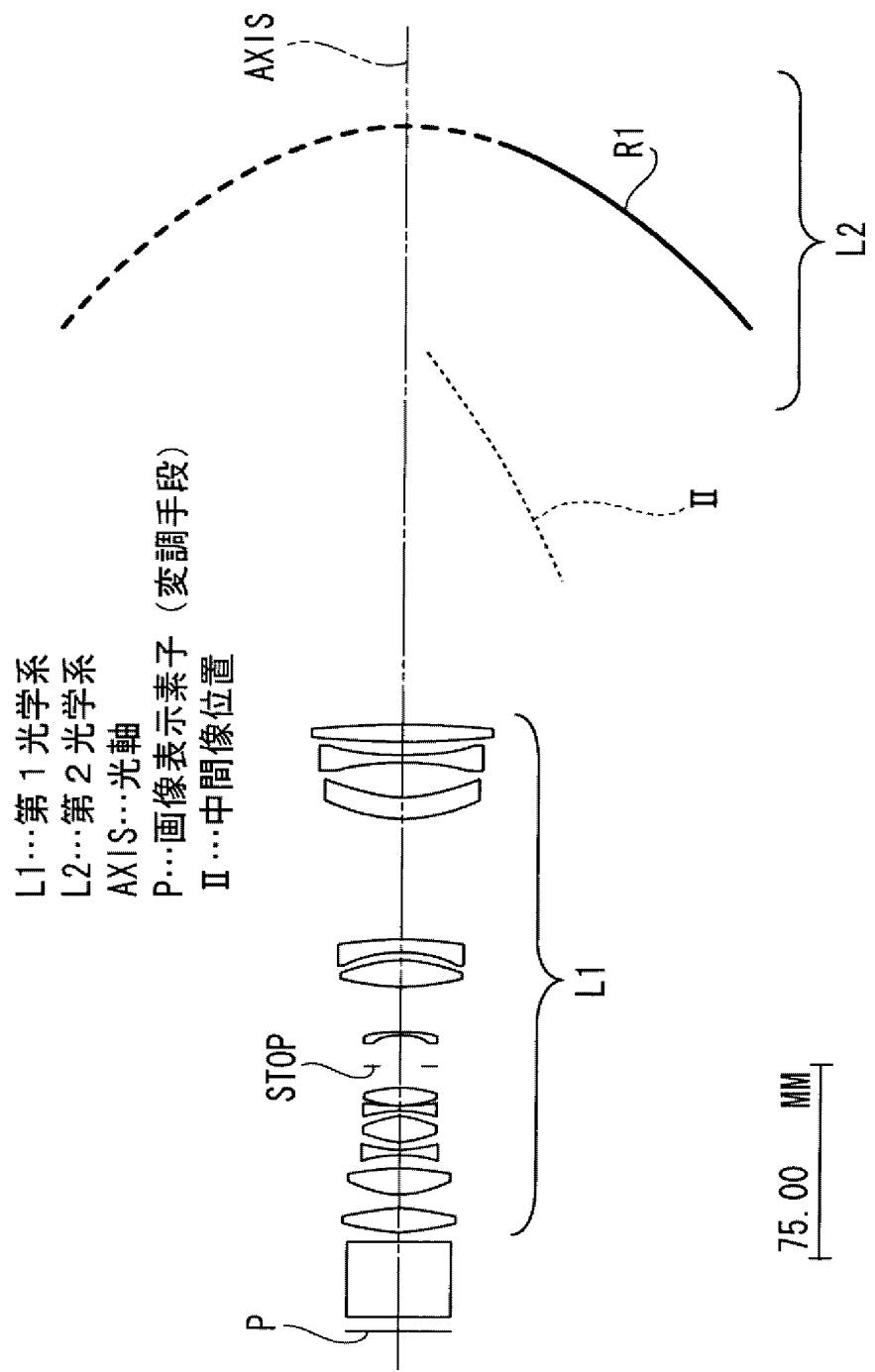


TV歪曲図
●評価面:スクリーン上



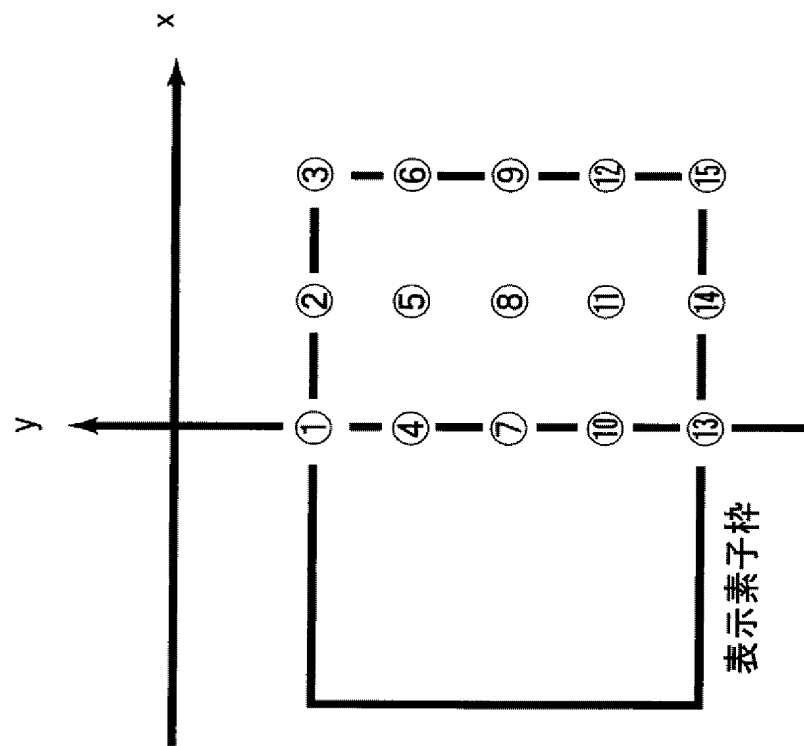
【図 3 7】



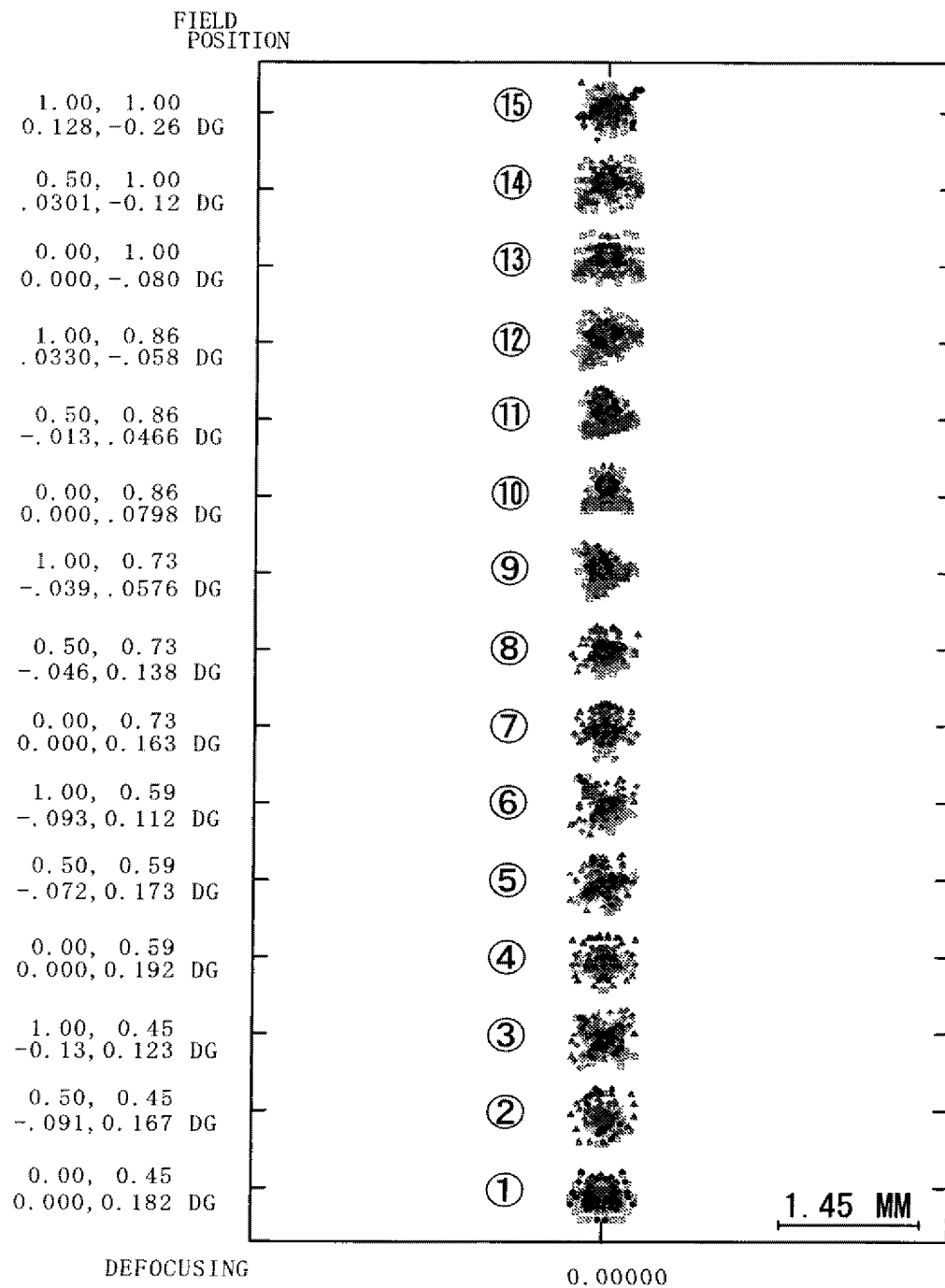


表示素子上の座標

	x	y
①	0.00	-6.20
②	3.36	-6.20
③	6.72	-6.20
④	0.00	-8.09
⑤	3.36	-8.09
⑥	6.72	-8.09
⑦	0.00	-9.98
⑧	3.36	-9.98
⑨	6.72	-9.98
⑩	0.00	-11.87
⑪	3.36	-11.87
⑫	6.72	-11.87
⑬	0.00	-13.76
⑭	3.36	-13.76
⑮	6.72	-13.76

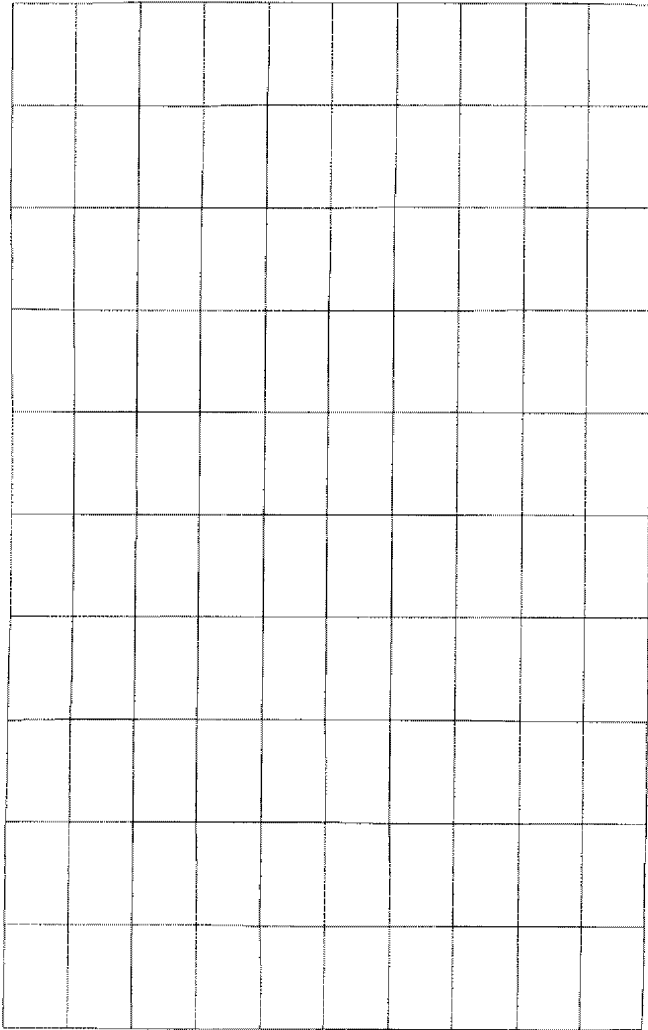


スポットダイアグラム(白色) スケール1.45mm(表示素子上 $7\mu\text{m} \times 2$ 相当)
 ●評価面:スクリーン上
 ●x,y座標は、表示画素上の座標 (x,y)=(0,0)は光軸
 ●使用波長 656.3nm, 620.0nm, 587.6nm, 546.1nm, 460.0nm, 435.8nm

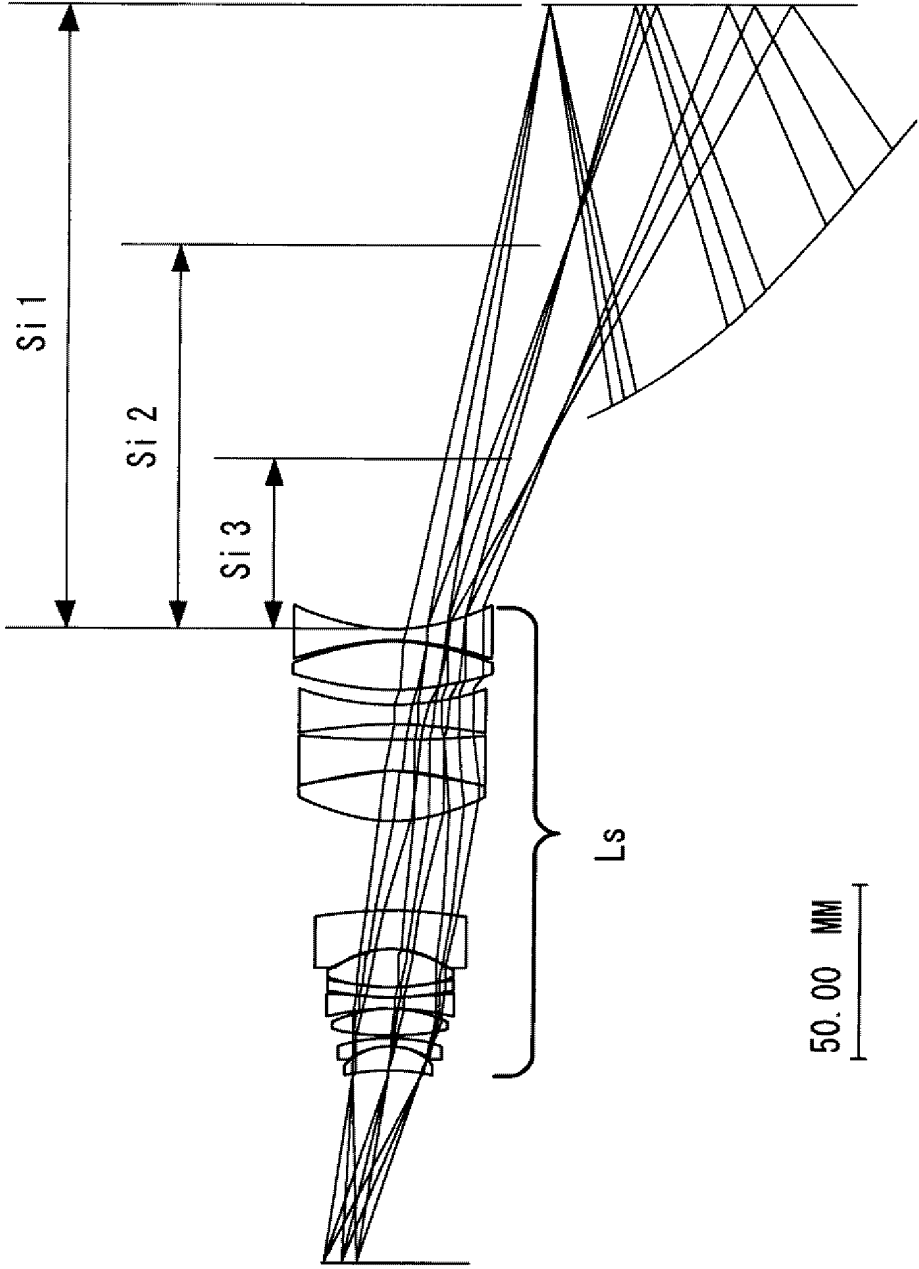


TV歪曲図

●評価面：スクリーン上

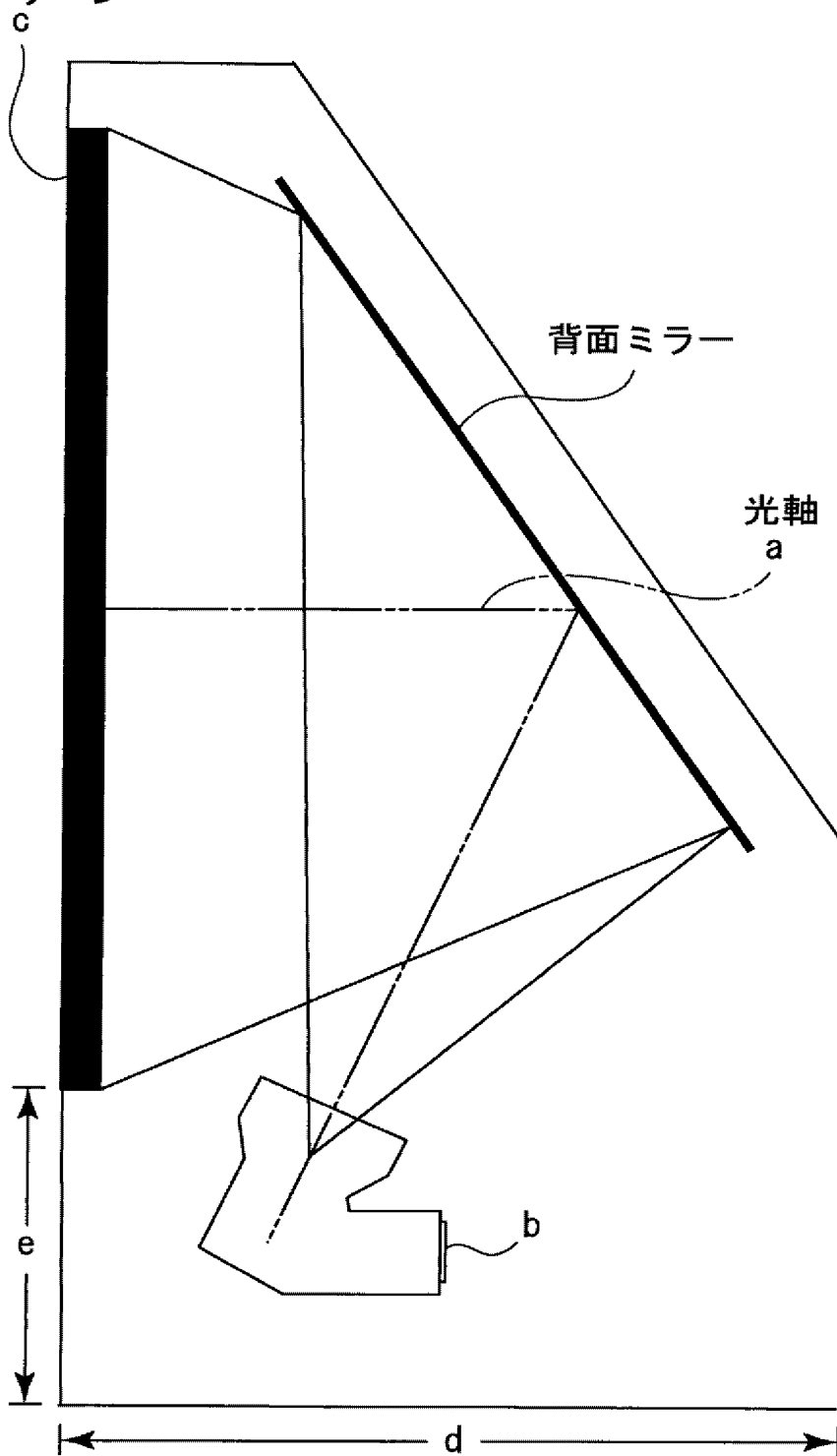


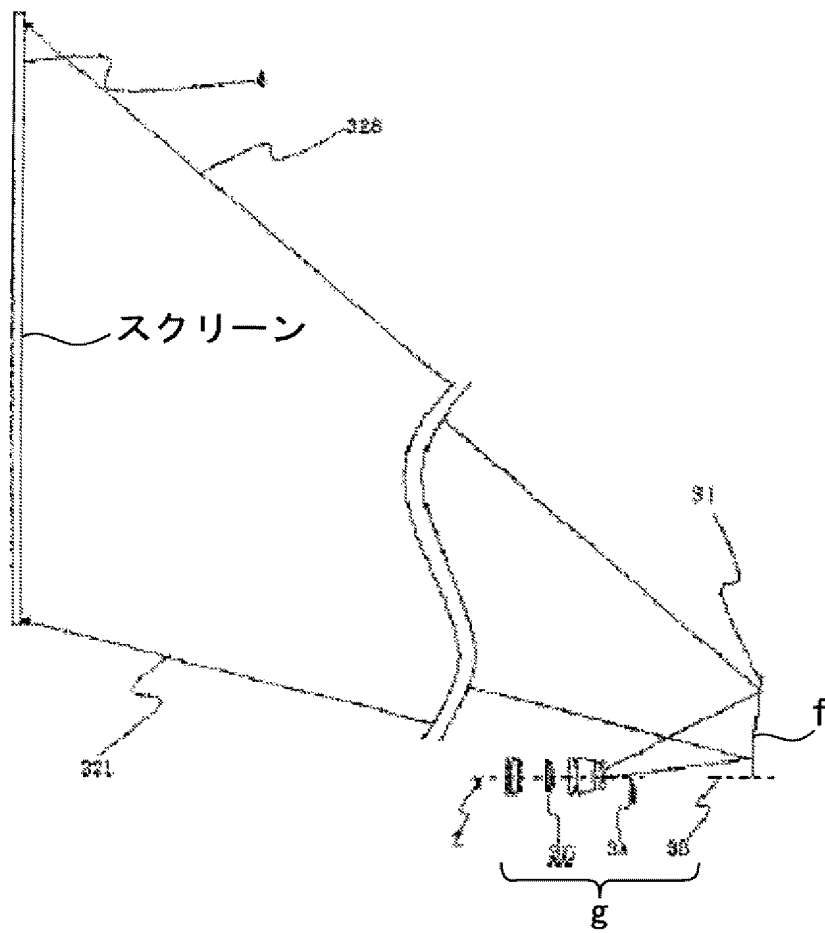
【図 4 2】



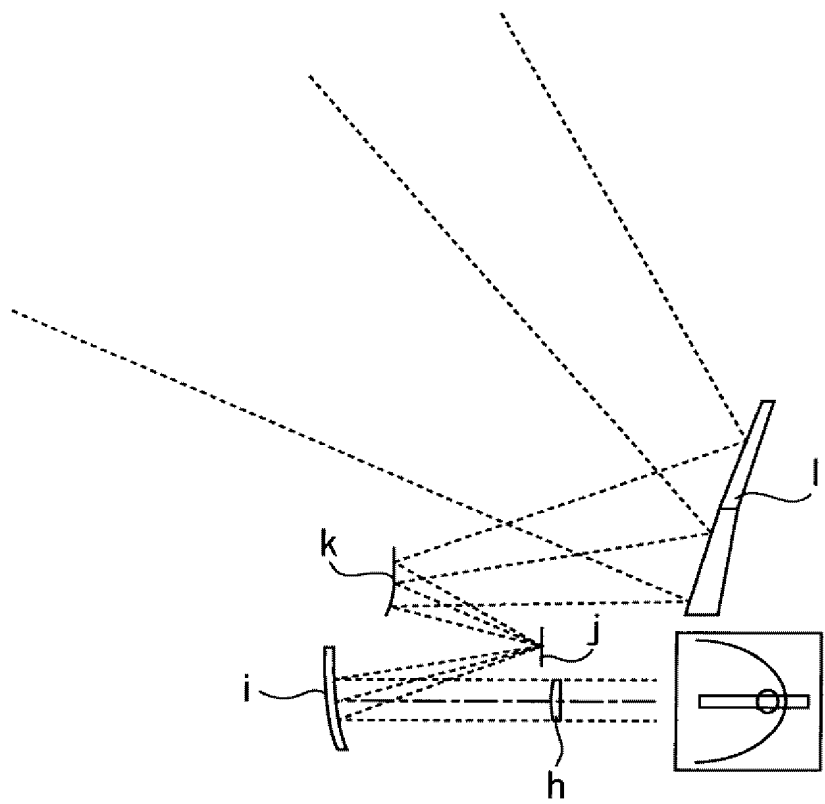
【図 4 3】

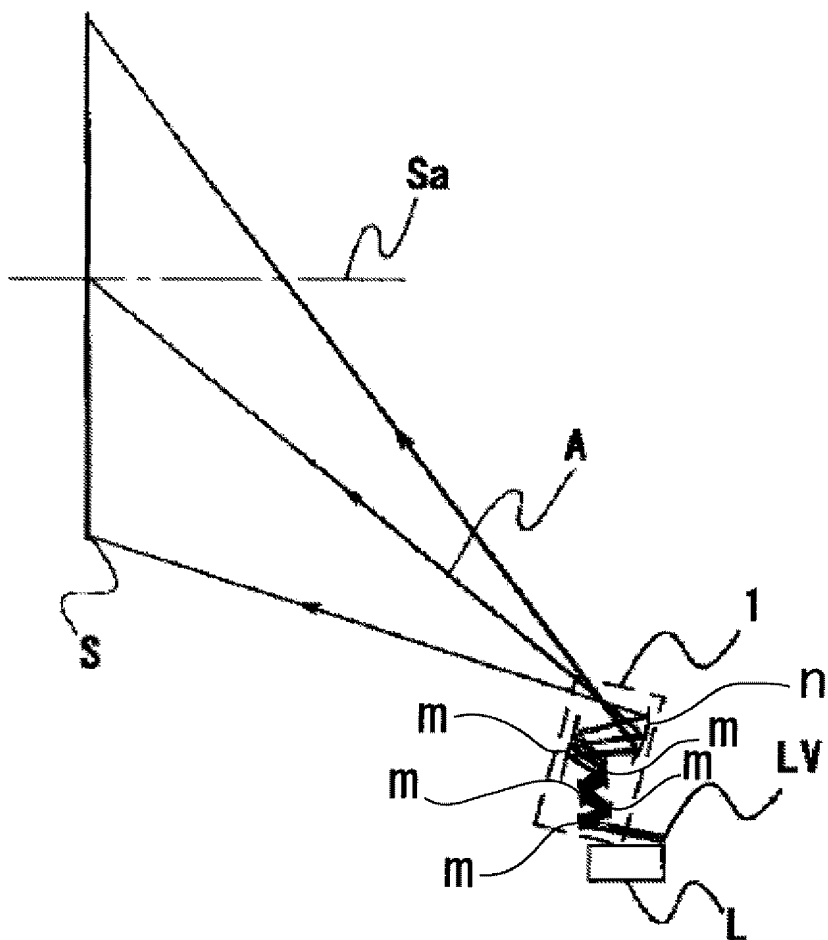
スクリーン





【图 4 5】





【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 回転対称光学系を用い、低歪曲で高解像力を維持しつつ、反射面の大きさを小さくしつつ、反射面の数を削減した投射光学系を提供することを課題とする。

【課題を解決する手段】 縮小側の1次像面から拡大側の2次像面へ拡大投射する投射光学系であって、上記1次像面の中間像（I I の位置）を結像する第1光学系L 1と、上記中間像による上記2次像面を形成させる凹面反射面R 2を有する第2光学系L 2とを備え、上記第1光学系及び第2光学系を構成する各面は共通の光軸を中心とした回転対称面で構成され、上記1次像面の中心から上記2次像面の中心に至る光線が上記光軸を交差し、次に上記凹面反射面で反射し、再度上記光軸と交差して上記2次像面に到達する。

【選択図】 図2

出願人履歴

0 0 0 0 0 2 1 8 5

19900830

新規登録

5 9 7 0 6 2 9 9 3

東京都品川区北品川 6 丁目 7 番 3 5 号

ソニー株式会社